

日藝ライブラリー

日本大学芸術学部図書館活動誌 No.2

監修：発行人 清水 正

編集人 戸田浩司

発行日 2015 年 9 月 24 日

発行所 日本大学芸術学部図書館

〒176-8525 東京都練馬区旭丘 2-42-1

TEL 03-5995-8306

ウリッセ・アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』(1621年)¹⁾の 博物誌的・美術史的な意味 ―科学と芸術のコラボレーション―

Insights into Ulisse Aldrovandi's *QVADRVPELVIV OMNIVM BISVLICORVM HISTORIA*
(1621, Bologna) with Consideration for 17th Century Flemish Painting

Yoko Mori, Lecturer, Graduate School of Art, Nihon University, Japan

はじめに

- I. ウリッセ・アルドロヴァンディの年譜と生涯の学術的な活動
- II. 博物学コレクション
- III. 『全偶蹄四足獣誌』
- IV. アルドロヴァンディの博物学とフランドル絵画との関係
- V. アルドロヴァンディ博物館

日本大学大学院芸術学研究科

非常勤講師 森 洋子 (西洋美術史)

ウリッセ・アルドロヴァンディ Ulisse Aldrovandi (1522-1605)

近代博物学 (Modern Natural Science) の樹立者のひとり。博物学の著名なコレクターおよび著作者、医者、植物・鉱物・昆虫・動物学者、哲学者

はじめに

16世紀のボローニャの博物学者ウリッセ・アルドロヴァンディ (1522-1606年) (図1) が著わした『全偶蹄四足獣誌』(没後の1621年に出版) に出会った契機は2013年前期、日本大学芸術学部江古田キャンパスでの博士後期課程の授業だった。「西洋美術史特講」のクラスで、その春に渋谷の文化村で開催された「ルーベンス展」について受講生たちと話し合ったことがあった。ある学生さんが展覧会の出品作や

ン・ブリューゲル (子) の《エヴァの創造のある楽園》(1630年代) について、「当時のフランドルの画家たちはどのようにして異国のライオンやヒョウなどを描くことができたのでしょうか、何か動物の手本画を参照したのでしょうか」と質問した。この作品自体はヤン (子) がヤン・ブリューゲル (父) の原作をコピーしたので、まず父のヤンや彼と同時代のフランドルの画家たちが手本にできる、同時代の動物の本を調べた。するとヤンの畏友ルーベンスはアルドロヴァンディの全三分冊の『鳥類誌』(1599-1603年) を購入し、その息子で古典学者となったアルベルトはアルドロヴァンディの全著作を所蔵していたということが判明した。さらにアルドロヴァンディとヤン・ブリューゲルはともにミラノのフェデリコ・ボッロメオ枢機卿をパトロンにしていたことが明らかになり、このボローニャの博物学者とフランドルの画家との出会いを探る意味もあるようだ。17世紀のフランドルには動物や植物を博物誌的な主題で描くことを専門にする画家も少なくなかったため、イタリアへの修業旅行中にボローニャのアルドロヴァンディの邸宅を訪れ、彼の膨大な標本コレクションを実見したり、それらを忠実に写生した水彩画やテンペラ画に感動した画家たちもきっといたであろう。これらの彩色画はアルドロヴァンディの許で働く彫版師によって木版画化され、彼の著作の挿画となったのである。アルドロヴァンディは生前に2冊、没後に編纂者による9冊の博物誌関係の書物を著している (図2) (詳細は以下の年譜を参照されたい)。したがってヨーロッパの画家たちがボローニャには行かなくても、彼の著作の膨大な数の挿画をパトロンから見せてもらい、参考にする機会も



図1 《ボローニャのウリッセ・アルドロヴァンディ 74歳の肖像》銅版画



図2 アルドロヴァンディの博物学関係の著書 ベルギー王立図書館稀観本室

あったであろう。しかし具体的な関連に関してはまだ研究が十分にされていないようだ。

日本大学芸術学部図書館ではこうした授業の質疑応答を知り、日本の研究機関でアルドロヴァンディの原書を所蔵しているところが非常に少ないこと、68点の挿画のある『全偶蹄四足獣誌』は17世紀後半の重版を最後に、ファクシミリ本も出版されていないこと、原書にある動物の木版画も芸術的な価値が高く、教育的な効果もあると評価し、上記の本を購入してくださった。2013年夏、同書が図書館の稀観本として所蔵されて以来、筆者が授業で学生さんたちとどのように活用したかは後述しよう（「Ⅲ-4.『全偶蹄四足獣誌』のための彩色画（水彩、テンペラによる写生画ないし構成画）と木版画との関係」参照）。

ここで留意したいのは、ポーラ・フィンドレンが指摘したように、アルドロヴァンディの没後、百科全書的関心に基づくアルドロヴァンディのミュージアムが「もはや頂点ではない」と思われるようになったことだ。というものの17世紀中期になると、博物学のコレクションに対し「驚異」とか「驚嘆」というカテゴリーに新しい意味が与えられるようになったのである。その意味で、彼のミュージアムが1657年、フェルディナンド・コスピ侯のコレクションに併合されたのも²⁾、アルドロヴァンディのミュージアムが当時の王侯貴族や人文主義者たちが自然界の不思議な珍奇、珍品を陳列する「驚異の部屋」に熱狂的な関心を示したからだった。

だが20世紀中期になってから、例外として1600年の『鳥類誌』の第2巻の第14書「ニワトリ論」のみがラテン語から英訳された。³⁾ さらに2003年、『地質学という用語の400年：1603年のボローニャのウリッセ・アルドロヴァンディ』という記念論文集⁴⁾が出版された。それはアルドロヴァンディがボロー

ニャ市評議会にコレクションを遺贈したいと申し出たとき、その一文に *Geologia* という用語をはじめて使ったからである。こうして21世紀になってアルドロヴァンディは再び、脚光を浴びたのである。

I. ウリッセ・アルドロヴァンディの年譜と生涯の学術的な活動

1522年 9月11日、ボローニャの貴族（元老院の秘書官・公証人）テセオ・アルドロヴァンディ（Teseo Aldrovandi）の息子として生まれる。母ヴェロニカ・ダントニオ・マレスカルキ（Veronica d'Antonio Marescalchi）も貴族の出であった。

1529年 7歳の時、父と死別。

1534年 12歳の時、自然、物、地域など、あらゆるものに好奇心旺盛な少年は密かにローマに旅した。それは冒険心だけではなく、古都ローマの文化遺産、古代神話の世界を実見するための自己学習の旅でもあった。母の切望で4か月後に帰郷する。ボローニャで著名な数学者アンヴァレ・デッラ・ナーヴェから数学を習う。

再びローマに行くが、雇主は見つからない。スペインのサンチャゴ・コンボステラへの巡礼の旅に向かうが、旅費がなく、徒歩での旅行となり、多くの冒険と危険を体験した。帰国後、人文主義者ジョヴァンニ・ガンドルフォの許で熱心にラテン語を学ぶ。

青年期にはボローニャとパドヴァ大学で人文科学、法律、哲学、論理学、医学、古典語を学ぶ。

1542年 ボローニャで公証人に登録。

1546年 母の希望で7年前から法律を学び、この年、学位を取得。

1548-49年 パドヴァに滞在し、医学を学ぶ。ピエトロ・カテーナに師事し、再び、数学に没頭する。

1549-50年 ボローニャに帰郷。異端の嫌疑をかけられ、7月12日、他の大勢のボローニャ市民とともに逮捕される（再洗礼派のカミッリオ・レナートに心酔したという理由。実際、パドヴァ大学はアヴェロイーズ派の主要センターのひとつだった）。ただし審理されるまで、ローマで自由な行動が許された。同地で彼はフランスの代表的な博物学者ギョー

ム・ロンドレ（トゥルノン枢機卿の侍医）と親交を結び、植物学、動物学、地質学に深い興味を抱くようになる。ロンデレを通じ、動物学の専門家パオロ・ジョーヴィオ（Paolo Giovio）と知己になる。ローマでは魚市場で魚介類を観察したことが、後の研究に役立つ。12月中旬、ボローニャへの帰宅を許される。

1551年 ボローニャに帰還し、ルーカ・ギーニ（Luca Ghini, 1490年頃—1556年）の許で薬学を学ぶ。今日、押葉標本の創始者として知られるギーニは、フィンドレンによれば、ボローニャとピサの大学で最初に博物学を教え、薬草学の第一人者として活躍したという。⁵⁾

1551-54年 植物の標本集めのために研究者たちと採集旅行を幾度も実践するが、これが植物調査研究の始まりとなる。ギーニとピサの植物園を訪問。⁶⁾

1553年 11月23日、ボローニャ大学で哲学と医学の博士号を得る。

1554年 同大学の講師となり、論理学と哲学を講義。

1556年 『全ローマのさまざまな地域や建物に見られる古代ローマの彫刻』をイタリア語で出版。

1560-61年 同大学はアルドロヴァンディに自然哲学の教授職をオファー。同大学で博物学の講義を担当する。

1568年 アルドロヴァンディの要請で医療目的のためにボローニャに公立植物園が開設され、アルドロヴァンディは園長に就任。同植物園はボローニャ大学の現 Orto Botanico 研究所の土台となる。

1572年 5月13日、教皇グレゴリウス13世（1502-85年）が選出される（図3）。アルドロヴァンディの母は教皇グレゴリウス13世の最初の従妹であった。教皇就任の日、偶然、ボローニャの田舎で大蛇が発見され、殺害後、アルドロヴァンディの許で保管される。教皇の紋章がドラゴンであったため、この大蛇は「ボローニャのドラゴン」と名付けられ、イタリア各地の為政者や人文主義者たちの大きな関心事となる。同時に博物学上の珍しいコレクションが展示された彼の書斎もイタリア中の評判となる（図

4）。実際の展示では教皇からの強力な庇護を期待して、大蛇の背中を膨らませ、鳥の蹄つきの2本脚をつけてドラゴン風に仕立てたらしい。アルドロヴァンディはその後、「自然界の前兆」に関し、教皇の助言者となるが、他方、教皇も彼の出版費用の援助を惜しまなかった。『自然論議』を執筆し、教皇グレゴリウス13世の子息に献呈。



図3 《教皇グレゴリウス13世》18世紀 油彩 ボローニャ大学図書館



図4 《ボローニャのドラゴン》テンペラ
©ボローニャ大学図書館

- 1575年 ボローニャの医師、薬剤師らとのテリアカ薬の調合に関する論争で、医師協会から5年間、医師活動の停止処分を受ける。
- 1577年 教皇グレゴリウス13世の助力で復職する。
- 1603年 書斎の膨大なコレクションを死後、ボローニャの市庁舎に遺贈することを決意。⁷⁾と同時に議会に彼の手稿の没後出版を約束させた。その遺贈文の中で彼が初めて「地質学」Geologia という用語を作った。
- 1605年 5月4日、ボローニャで死去。同市のサント・ステーファノ聖堂の礼拝堂に埋葬される。享年82歳。

生前の博物学関係の出版

- 1599-1603年『オルニトロギアすなわち鳥類誌全十二巻』全三分冊
- 1602年『昆虫論全七巻』

没後の博物学関係の出版（市議会が刊行）

- 1605年『無血動物論全四巻』
- 1612年『魚類論全五巻および海獣論一卷』
- 1616年『単蹄四足獣総論』
- 1621年『全偶蹄四足獣誌』
- 1637年『有指胎生四足獣論全三巻および有指卵生四足獣論全二巻』
- 1639年『蛇とドラゴン誌全二巻』
- 1642年『怪物誌、および動物誌から除外されたもの』他
- 1648年『金属ミュージアム全四巻』
- 1667年『デンドロギアすなわち樹木学二巻』
- フィンドレンによると、この本は「驚異」や「不思議」を最重要価値とみなした、フェルディナンド・コスビのパロディ的蒐集精神に影響されたオヴィディオ・モンタルバーニの著作という⁸⁾

アルドロヴァンディの生涯を展望してみると、彼の経済的状況についてこれまで誤解されている側面があった。すなわち彼は裕福な貴族の家に生まれ、コレクション購入の資金も潤沢だった、といった記述が少なくなかった。だがアルドロヴァンディは7歳で父を失い、少年時代は放浪のような巡礼の旅をしたという。⁹⁾生涯、度重なる調査・探検旅行の諸経費、または博物学関係のコレクションの購入に関して、パトロンたちに興味を抱いてもらい、財政援助を依頼している。¹⁰⁾

その他、十分に考慮されるべき点は、彼のボローニャ大学教授就任の背景である。同大学はヨーロッパ最古の総合大学という誇りから、通常はボローニャ以外の都市、あるいは広くヨーロッパから世界的な研究者を長年かけて探し、教授のポストをオファーしていた。こうした厳しい状況下で、地元ボローニャ出身のアルドロヴァンディが1561年に正規の教授職を得たのも、その研究業績が特別高く評価されたからである。¹¹⁾また彼の講義に参加する学生数が年々増大する中、彼らからの教授就任の要望が高かったといわれている。アルドロヴァンディはフランス語、スペイン語、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語をマスターし、¹²⁾約3500冊以上の書物を書庫に所蔵していた。だが活字からの知識だけではなく、何よりも動物、植物、鉱物に関する情報を自らの目で観察し、それらの標本を収集し、多くの研究者から直接、話を聞いて学んだのである。彼はどんな事物もまず自分で確かめ、それを理解した上で記述していた。¹³⁾

当時のボローニャ司教で枢機卿ガブリエーレ・パレオッティ（図5）と盟友アルドロヴァンディとの関係は注目に値する。高橋健一の論文「ガブリエーレ・パレオッティの『聖俗画像論』のために」（2009年）によれば、同枢機卿はトリエント公会議



図5 《ガブリエーレ・パレオッティ枢機卿の肖像》18世紀 油彩 ボローニャ大学図書館

(1545-63年)で教皇の顧問として、重要な役割を演じたが、とりわけ「聖画像に関する教令を自らの責任で起草」した。その際、パレオッティは『聖俗画像論』の執筆にあたり、アルドロヴァンディからも助言を得たという。パレオッティは「聖書や教会の世界はもちろん、世俗の歴史も自然も神の御業だから、歪めてはならない」と論じた。そして聖画像に従事する美術家は空想を放棄して、現実の対象を徹底的に模倣し、真実もしくは真実らしさを追求し、事実と異なる「嘘偽りのもの」を表現してはならない、ということを強調した。こうしてパレオッティは神の御業を歪めるものを一種の画像用の「禁書目録」の対象としたのである。¹⁴⁾ この主張はアルドロヴァンディが画家に要請した基本的姿勢と重なっていた。すなわち自然すなわち神の御業を忠実に描写することが必須条件であった。

ボローニャ大学教授で歴史学者ジュゼッペ・オルミはパレオッティが「芸術と科学の融合」の施策をとることで、ボローニャの人文主義者たちやアルドロヴァンディのような博物学者を支援したことに注目した。つまりパレオッティはボローニャの司教として1576年に発令した教区信徒たちへの予告に、「神がベストの蔓延からボローニャを救済し、都市を豊かにしただけでなく、平和を保たせ、諸芸術を促進し、科学に光を与えた」と述べ、それをカトリック改革施策の根拠とした、という。¹⁵⁾ パレオッティとアルドロヴァンディの関係は今後も研究対象とされるであろう。

II. 博物学コレクション

『全偶蹄四足獣誌』を始め、アルドロヴァンディの博物学関係の全著書の基礎となったのは、その世界的な博物学コレクションであった。彼のコレクションがピークに達したのは1595年、つまり73歳の頃だった。当時、彼は「私のミクロコスモスには18,000点以上の様々な事物があり、そのうち、7000点が乾燥植物標本で、15巻のノートに貼付している。そのうちの3000点は生きているかのように描かれたものだ」¹⁶⁾と語っていた。その他は地上、空中、水中の動物、鉱物、大理石や岩石類に及ぶが、さらに美術史上、重要なのは水彩、テンペラで画家たちに描かせた8000点以上の自然物の写生画またはほかの文献からの模写画である。これらは「紙のミュージアム」と称されるほど、高い価値をもっていた。前述したように、そのためアルドロヴァンディは芸術的な才能よりは、忠実な再現力をもつ画家を雇用

した。先行例を模写させる時も、例えば鳥の羽毛などは、細部をより忠実に描き直させたという。アルドロヴァンディの周囲にはこうして実物を写生する画家、それを版木の上に転写する素描家、実際に彫る彫版師という芸術家集団がいたのである。¹⁷⁾ 実物をできるだけ再現するという点で、アルドロヴァンディは後述するコンラット・ゲスナー(1516-1565)よりはるかにこだわっていたといえよう。晩年のアルドロヴァンディの「自然劇場」には数千の動物(大半が動物の一部)、大きなキャビネットに鉱物標本、アルドロヴァンディ自身が語るように15巻にわたり(紙に)貼られた7000点の乾燥植物、18冊に収納された8000点の「自然物」の描画は水彩とテンペラの混合技法によるものだった。¹⁸⁾ そのうち2冊は3000点以上の植物の写生画、2冊は魚と四足獣、3冊は鳥、1冊は昆虫、10冊はその他の主題の彩色画という内訳だった。アルドロヴァンディはそれらを14の戸棚に飾り、ピナコテカ(絵画館)と称していた。アルドロヴァンディは大学や自宅で学生たちに講義をしたとき、「百聞は一見に如かず」的な教育効果を十分に意図していた(図6)。彼は同僚と動物の解剖も行っていたので、学生たちに内臓の仕組みを現物で説明したのであろう。後述するが、ウシの胎子、胎膜、反芻動物の複胃の構造、内臓にできる毛球など、アルドロヴァンディの動物解剖学上の知識は現代にも通じる水準といわれる。

こうして彼の広範囲な知識とそれに基づく蒐集の評判はイタリア全土に広まり、1571年のある訪問者は「ここには地上、地下、空気、水の中に発見される自然物の概要がある」と述べていた。¹⁹⁾ フラ・ジョヴァンニ・ヴォルーラは1574年、「この町を通過する学者たちの全員がたえまなく彼の自然の劇場を訪れている」²⁰⁾とボローニャの行政長官に報告した。



図6 ヴィットリオ・マリア・ビガリー《学生たちに講義をするアルドロヴァンディ》1748年 フレスコ
ボローニャ アルドロヴァンディ宮殿広間

いやボローニャ大学内外の学者たちばかりでなく、医者、薬剤師、収集家たちも押し寄せてきた。アルドロヴァンディが収集した「自然の珍品」の展示室は「ミュージアム」「書斎」「劇場」「小宇宙」「図書室」などと呼ばれたが、これらのコレクションが多角的な視点から評価されていたという証となろう。²¹⁾

アルドロヴァンディは生前所蔵していた3500冊以上の図書、18,000点以上の博物学関係のコレクションを、すべて没後にボローニャ市に寄贈しようと決意したのも、「学問の成果はすべての人類の財産に属すべきだ」と解したからであった。また彼の膨大な原稿は後年、ボローニャ評議会によって出版された。桑木野幸司はアルドロヴァンディ自邸の展示室や図書室を1610年当時の目録に従って再構成し、こう分析している。「学術的分類への志向とスペクタクル性とは同居していたのがアルドロヴァンディの蒐集展示空間であり、(中略)それが後世の自然史博物館のモデルとなったことは確かであろう。」²²⁾ 確かに彼の展示室の天井、壁、ドアの上などに展示されたクジラやサメの骨、海獣の剥製、ドラゴンなどは訪問者にとってどんなにか驚異の存在だったであろうか。このコレクションがボローニャの市庁舎に展示されてからは、一層世界中に注目された。1647年暮れにジローラモ・ラヌッツィ・マンジョーリによって4.6mのナイル河のワニが贈呈されたときは、大評判となった。²³⁾

Ⅲ.「全偶蹄四足獣誌」QVADRVPEVDM OMNIV[M] BISVLCORV[M] HISTORIA²⁴⁾

ボローニャ、1621年発行、1040頁、索引11頁。テキスト：ラテン語、木版画の図版68点。

Ⅲ-1 扉絵について

『全偶蹄四足獣誌』はウリッセ・アルドロヴァンディの没後16年を経て出版された。扉絵(図7)に詳細に記載されている書誌データを参考にしながら、出版状況を述べてみよう。

アルドロヴァンディの遺した膨大な執筆原稿を整理、編纂したのがベルガエ(当時のネーデルラントのラテン語読み)出身のジョヴァンニ・コルネリオ・ウテルウェリオ(Giovanni Cornelios Uterverios または Wterwer, Wertwer)で、デルフト出身であった。彼はボローニャ大学に留学し、医学を学び、1594年に卒業した。医者となったが、アルドロヴァンディの弟子となり、やがて彼の後継者として博物学の教授職を継承した。

ウテルウェリオは1619年に没したため、一緒に仕事をしたスコットランドのムレスク伯トーマス・デンプステル(Thomas Dempster, 1579-1625)が編纂の仕事を継承し、本書を刊行させた。彼はピサ大学の教授を経て、ボローニャ大学の教授に就任した。イタリアではトスカーナの大公コジモ2世の庇護を受けていた。

ボローニャ大学の書誌データはウテルウェリオとデンプステルを『全偶蹄四足獣誌』の「第2著者」と記している。それは彼らがアルドロヴァンディの没後、故人の膨大な原稿を整理、編纂し、不足分を加筆したからである。したがって彼らは編者かつ共著者ともいえよう。²⁵⁾ つぎに言及されているジローラモ・タンブリーニ(Girolamo Tamburini)について、扉絵の一文を直訳すると、「彼はこの本が日の目を見るようにした」とあるが、彼は発行者であり、書籍販売業者でもあった。²⁶⁾ 1621年にこの本を印刷したのはボローニャの印刷、出版業者セバスティアノ・ボノーミ(Sebastiano Bonomi)であった。

さらにこの本がザルツブルクの大司教・領主パリス・グラーフ・フォン・ロドロロン(Paris Graf von Lodron, 在位1619-1653)に献呈されたと明記されている。彼の紋章(図9)は上部に示されている。本書の冒頭で、タンブリーニがフォン・ロドロロン大司教への献辞を書いているが、それによれば、大司教は1588年から2年間、ボローニャのイエズス会神学校 Collegio Nobilium で学んだという。文末には大司教に対し、「価値多き、優れた聖堂の柱」と表現している。²⁷⁾ 実際、フォン・ロドロロンはドイツの30年戦争の影響を受けなかったザルツブルクに住んでいたが、ドイツからの多くの戦争避難民を受け入れ、また1617年、ベネディクト派の総合大学を創立するなど、大物の聖職者として知られていた。

銅版画の扉絵の下部に寓意図像的な2匹のライオンが額飾りを囲んでいるが、そこには「剛毅と寛大」FORTITVDO ET MAGNANIMITAS という出版者の標語(図8)が記されている。さらに左のライオンの足の下に木版画の扉絵制作者 Bapt.^a Coriolanus f. (パッティスタ・コリオラーノ制作)の名が刻まれている。彼すなわち Giovanni Battista Coriolano (1590?-1649) はボローニャで活躍した画家、素描家、版画家であった。父はニュルンベルク出身の優れた版画家レーデレル(Lederer, 1530, 40年頃-1603年)で、16世紀中頃、イタリアに定住、伊名クリストーフォ・コリオラーノ(Cristoforo Coriolano)と名乗った。

この本の扉絵には「詳細な索引」の明記がある。

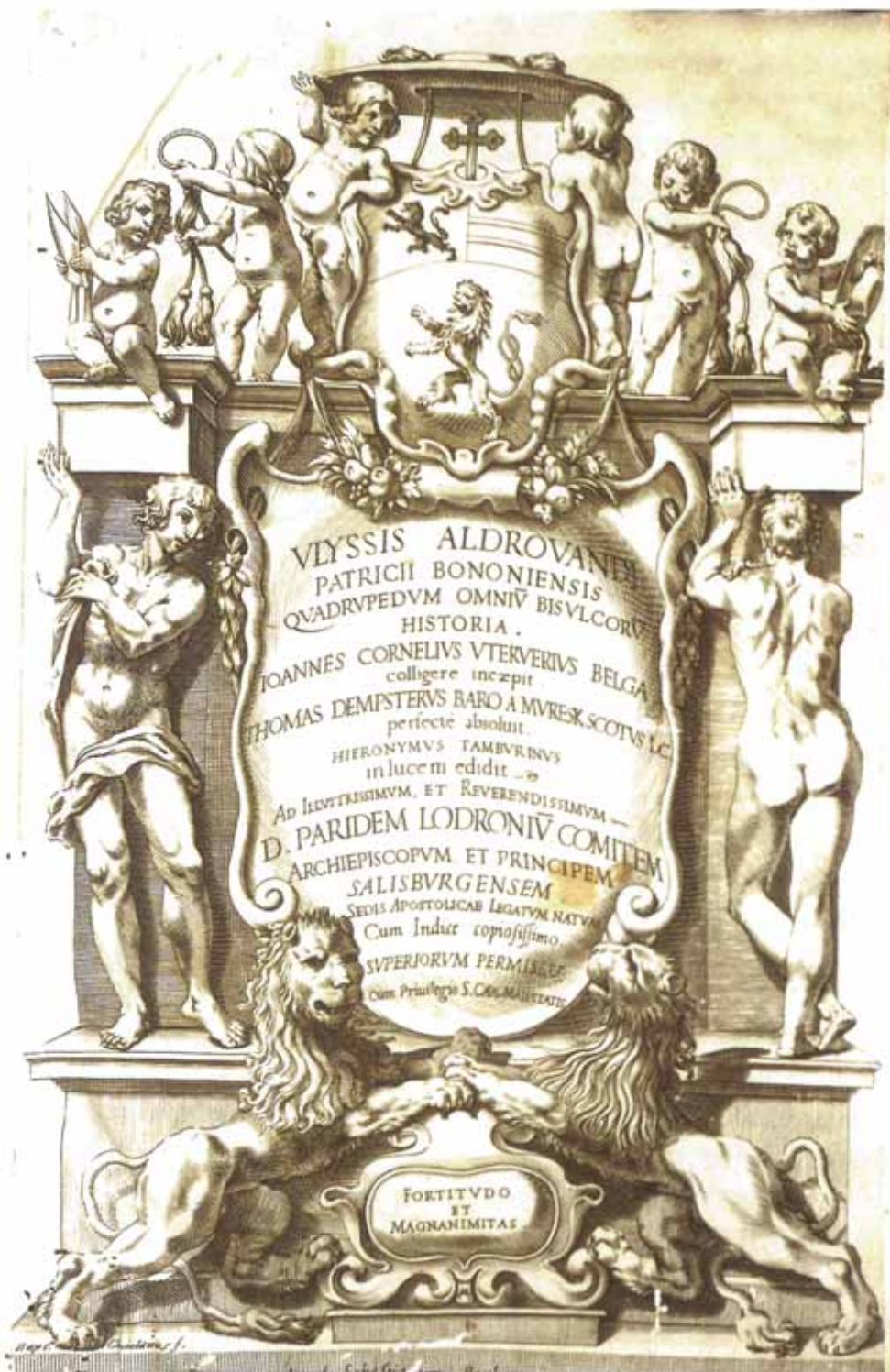


図7 ウリッセ・アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』扉絵 1621年日本大学藝術学部図書館 銅版画



図8 「剛毅と寛大」(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』の扉絵部分) 銅版画



図9 ザルツブルクの大神父・領主パリス・グラーフ・フォン・ロドロン墓碑

実際、巻末には3ページにわたり、ラテン語のアルファベット順で動物の名称とそれに該当する多国語、例えば、ヘブライ、カルディア、アラブ、サラセン、シュメール、ドイツ、ベルガエ（ネーデルラント）、ゴート、スコットランド、イタリア、フランス、スペイン語、英語の表記が列挙。さらに7ページにわたる事項索引がある。

『全偶蹄四足獣誌』は1642年にボローニャ、1647年にフランクフルト、1653年にボローニャで重版が続く。

ボローニャ大学は website で同大学図書館所蔵の1696年版の『全偶蹄四足獣誌』全頁の digital data を以下に公開している。

<http://amshistorica.unibo.it/129>

Ⅲ-2 本書の内容

本書は偶蹄四足獣の中で一番頁を割いているウシの仲間（雄ウシ、雌ウシ、子ウシ、野牛、水牛を含む）から始まり、ヒツジ（雄ヒツジ、雌ヒツジ、子ヒツジ）、ヤギ（雄ヤギ、雌ヤギ、子ヤギ、アイベックス）、カモシカ、シカ（雄シカ、雌シカ、ノロジカ、ヘラジカ、ジャコウジカ）、トナカイ、サイ、ラクダ（ヒトコブラクダ、



図10 《ウシの胎膜と胎子》（アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 72）木版画

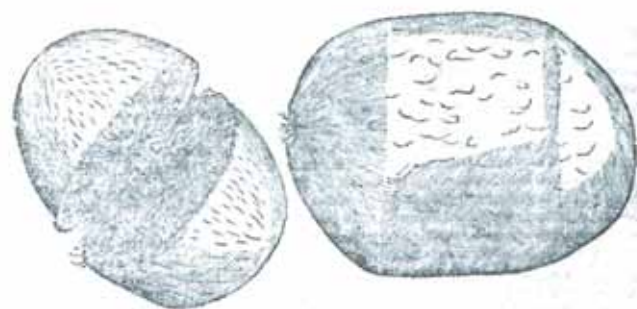


図11 《ウシの内臓にある毛球》（アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 40）木版画

フタコブラクダ）に続き、イノシシおよびブタ（子ブタを含む）で終わる。

動物の名称、分類、生態に関し、日本大学生物資源科学部獣医学科獣医解剖学研究室の五味浩司教授から多大なご指導をいただいた。五味教授は本書の図版のなかに示されている形態学的な観察所見において、16世紀当時の水準としては、獣医学的に見て以下の注目すべき記載があることを指摘された。1605年に他界したアルドロヴァンディがすでに反芻動物（ウシ、ヤギ、ヒツジ、シカなど）の内臓の特徴を理解し、図解していたことは特筆に値する。例えば、『ウシの胎盤と胎子』（図10）は「子宮小丘」、「胎膜」、「胎盤節」といった反芻動物に特有の叢毛胎盤の特徴を明確に図解している。同じくウシの内臓から見つかった毛球の外観とその断面を割った時の内部の様子も図解している（図11）。これらはアルドロヴァンディが実際にウシを解剖して毛球を見つけ、動物の病理学的な所見を示した図版といえよう。それはウシの第2胃の中から見つかったもの



図12 《動物の内臓にある毛球》日本大学生物資源科学部
獣医学科獣医病理学研究室 撮影：五味浩司

で、アルドロヴァンディ自身、毛球と認識していた。動物が自らの体を舐めたときに抜けた毛に、痰が混ざってできる毛球は、非常に軽く、軽石のようだと述べている (p. 39, 以下、ページは原書の該当頁)。アルドロヴァンディが持っていたのは、赤牛からの赤い毛球と黒牛からの黒い毛球である。五味教授はこの説明を読まれ、「大変に優れた観察表記で、的確この上ない正確な記載」であり、「動物は自分の被毛をよく舐めるが、毛玉のようなものが胃や腸などの消化管の中でくっつきながら徐々に成長して大きな球や紐のようになる。大きなものは直径が20センチ以上にもなる。これらは動物を解剖した際、内臓の中から見つかることが多い。例えば、毛球が胃の出入り口や腸の中を塞いでしまうと、消化管の運動が悪くなったり、採食ができなくなったりして病気を引き起こす原因となりうる」(図12)と語られた。

ヒツジの複胃の解剖図 (p. 398) には第一胃 (瘤胃)、第二胃 (蜂巢胃)、第三胃 (葉胃)、第四胃 (皺胃) などの部位がA、B、C、Dで図示されており、さら



図13 《ディオドロス羊》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 405) 木版画

に各々の胃袋の内面に見られる異なった模様を示す胃粘膜の構造までも正確に表現されている。この他、アルドロヴァンディの図版に示されているディオドロス羊 (図13) は、ふさふさとした長い立派な尻尾をもっている。ヒツジは一般的に生後間もなく断尾するが、これは糞などによる、商品としての羊毛の品質の低下を防ぐために行われるものであった。しかし本来、この図版に示されているような大きく立派な尻尾や臀部に蓄えられた脂肪分は食した際に非常に美味であるとされている。テキストではとくにアラビアで生育するヒツジについて、「去勢された雄ヒツジや、去勢されていない雌ヒツジ、雄ヒツジも太くて巨大な尾を持ち、脂がのっている」²⁸⁾などと、記述されている。おそらく当時は尻尾も料理用としても利用されたのであろう。さらに五味教授によると、寒暖差の激しい山岳地帯に生息し、高級繊維素材としてカシミヤの原料となる長く柔らかい毛質のカシミヤヤギが、正確に描かれているという (p. 635)。このように、本書には現在の畜産学的な概念に通じる点も随所に含まれていることが分かる。

特に興味深いのは《雄ヘラジカ》(図14, 15) で、頭部にシカの角、顔がウマ、胴体と肢がシカとい



図14 ヤコボ・リゴッツィ《雄ヘラジカ》16世紀末
テンペラ ©ボローニャ大学図書館



図 15 《雄ヘラジカ》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 869) 木版画



図 16 《雌ヘラジカ》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 870) 木版画

う、あたかもキメラ動物であるかのような姿で描かれている。しかしアルドロヴァンディはテキストの中で、「この図は実際に生きた動物を前に制作され、トスカーナ大公フェルディナンドを通じて渡されたものであるが、真正であることには間違いない」²⁹⁾といった内容を明記している。今日、この作品(図 14)はフェルディナンドの宮廷画家ヤコボ・リゴッ

ツィの制作として知られている。本書でこの動物の木版画のある次頁に、四肢がすらりと長く、背の部分が特徴的に隆起し、角をもたないが、鬃が生えており、頭部はやぎ、脚はキリンのように見える動物(図16)が描かれている。³⁰⁾実際にアラスカなどに棲息する雌のヘラジカの特徴が表現されている。だがこの動物に関してもアルドロヴァンディは「図はクラコフから送られてきたが、雌ヘラジカ」と記している。このように本書にはアルドロヴァンディが実見していないが、他者から送られた動物の図版も含まれていた。しかもそれらについての出自もテキストで明記されている。したがって当時はまだキメラ的動物という意図をもって示した図版ではなかったのであろう。

本書にはウシ、ヤギ、シカなど、角だけの図版が3点(p. 351, 757, 765)、頭部と角の図版が3点(p. 740, 775, 857)掲載されている。つまり医者であったアルドロヴァンディは角の成分の医療的な効果に関心があったのであろう。五味教授は角についてこう説明された。交易によって東洋での考えが伝聞された可能性もある。奇蹄類で三蹄のサイを本書に所収したのも、サイが角を持っているからだろうか(ただしサイの角はウシやヤギの角のように、角の内部に骨性の構造=頭蓋骨の一部=が芯となって支持していない。つまり角の内部は空洞でケラチンタンパク質を成分とする硬い角質が皮膚から盛り上がり、爪のような構造である)。サイの角は古来より工芸品や漢方薬(犀角)として珍重されたゆえに乱獲され、本書に示されている一角を持つインドサイは現在一部の地域では絶滅してしまったといわれている。

アルドロヴァンディの角に対する関心は格別深いものがあるのではと想像できる。伝説上の動物である一角獣の角は解毒作用があり、王侯貴族から珍重されたことはよく知られている。本書の22章には「ベゾアールの石」と題され、ある角とその一片の図版(図17)がある。テキストの中でアルドロヴァンディ自身、これは石か骨かはわからない、しかし「ベゾアールの石」自体、薬学的な効果があるため、偽物も出回っていると記している。さらに彼は16世紀のスペインの医者・植物学者ニコラス・モナルデス(1493-1588)を引用し、インドのガンディス河の対岸で中国に近い地域にケルヴィカブラ(Cervuicapra, シカのような角を持ったヤギ)が生息していること、この動物は解毒作用のある特別な草を食べるため、内臓に結石ができると説明している。この結石は、毒をもった動物に咬まれたとき、解毒

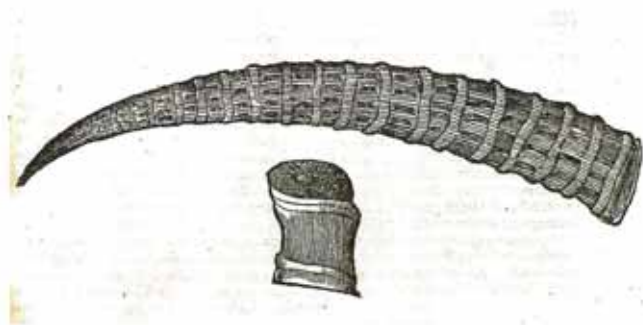


図 17 《ベジアールの石》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 757) 木版画

作用をもつ。有毒の動物の殺し方はこの結石の粉末を液体に溶かし、動物にかけると死ぬという。³¹⁾ 五味教授はアルドロヴァンディが引用した「インドのガンディス河の対岸で中国に近い地域」とはネパールからチベットにおよぶ地域であり、図17の角の形はチベットカモシカの角である「^{レイヨウカク}羚羊角」のものではないか、と推定された。漢方薬では解熱、鎮痙、鎮静などの作用があることで知られるという。五味教授は「ウシの胆石は『^{ゴウ}牛黄』と呼ばれ、いろいろな処方なされている」と付け加えられた。

別の観点で圧倒されるのは1040頁にわたるテキストには、偶蹄四足獣について膨大でかつ詳細な百科全書的ならびに文化史的な解説があり、読み物としても興味をそそられる点である。実際、アルドロヴァンディは古典古代から同時代の豊富な文献を引用、紹介している。例えば、古代ギリシャのホメロスの英雄叙事詩、ヘロドトスの『歴史書』、アリストテレスの『動物誌』、プルタルコスの『饗宴』、古代ローマのプリニウスの『博物誌』、ルキアノスの諷刺的対話作品、旧約や新訳聖書、キリスト教の教父たち、神学者による動物の記述、中世の動物譚、ルネサンスの寓意図像集たとえばアルチャーティやカメラリウスなどの作品を紹介している。例えば「ヤギ」の章から展望してみると、「順序の理由」つまり、ヒツジの後にヤギを論じる理由、続いて「同義語、語源」「誕生、形状の叙述」「特徴」「生育地」「性格と習慣、本能と欲望」「山羊酒」「鳴き声」「食物、飲み物」「共感と嫌悪」「交尾、分娩、生育、身体的な情動」「前兆」「寸詩」「図像」「ヒエログリフ」「^{エンブレマツク}寓意図像」「象徴」「古銭学」「散文」「物語/歴史」「寓話」「伝説」「変身譚」「秘儀」「問答集」「形容詞」「異名」「観相学」「諺」「供犠での使用」「ヘブライの供犠での使用」「料理での使用」「医学での使用」「そのほかの使用」といった内容である。

これらの項目の中で「ヤギの象徴」について注目しよう。大妻女子大学准教授渡邊顕彦氏の訳出によ

れば、アルドロヴァンディは雌ヤギが地面に生えている美味しい草ではなく、あえて苦い藪の枝を食べる行動を、「進んで重荷になる労苦や面倒な仕事をする人間の行為」の象徴で、「神々自身にとっても労苦は徳目を助長するもの」と解説している。³²⁾

渡邊准教授によれば、「ヤギ物語」の項目にもさまざまな愛情深い雌ヤギの話がある。その一例は、ビヌケムにヨハネが率いるローマ軍が来たとき、逃げ出した女性の中に子を出産し、赤子を産着でくるみ、地面に置いた母親の話である。彼女は別の事件に遭遇したらしく、二度と現れなかったが、出産したばかりの雌ヤギが赤子を見つけて、自分の乳を飲ませ、犬や別の野獣から赤子を守っていたという。³³⁾

ヤギの諺についても引用されているが、諺はその動物の習性を伝える情報となるだけでなく、人びとに教訓を語るからであろう。例えば、「若木の(満ちた)野に雌ヤギを(放つ)」(In agro surculario capras.)³⁴⁾ という諺はこの動物をこうした場所に放牧すると、彼らは無節制な食欲から若木を喰いつくし、畑を駄目にしてしまう、という意味である。おそらくこの諺には(ヤギのような)無節制な衝動は若者(畑の若木)を墮落させる、という教訓があるのだろう。調べて見ると、この諺の起源は古代ローマのマルクス・テレンティウス・ワロの『農業論』³⁵⁾ にあった。他にも「ほかの者は折々、山羊の毛のことで争い、武装したものは些細なことで格闘する」(Alter rixatur de lana saepe caprina, propugnat nugis armantus.) という諺もあるが、価値のないもののために武装してまで争う愚行をヤギの毛を奪い合う行為に比喩している。ヤギの毛は羊毛とは異なり、お金にならないからである(もちろんヤギには前述したカシミヤヤギのような豊富な毛の中に希少価値の高い柔らかい毛を持っている種類もいるが)。これはホラティウスの『諷刺、書簡、詩の技法』³⁶⁾ からの引用であった。アルドロヴァンディが古代ギリシャ、ローマの文学、思想に関しても造詣が深いだけでなく、紋章学、寓話、伝説、諺などにも、驚くべき深い教養をもつ人文主義者であることが分かる。桑木野幸司は「たとえ科学的な叙述であっても、文献学的な情報にも多くの紙幅が割かれることとなった。それは狭義の科学者のみを対象とするのではなく、むしろ広く当時の『文芸共和国』の住人を読者として想定した態度であったといえる」³⁷⁾ と述べている。まさしくアルドロヴァンディは当時の人々から「ボローニャのアリストテレス」「第2のプリニウス」として賞賛されていた所以も



図18 《双頭奇形のウシ》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 131) 木版画



図19 《双頭奇形のウシの骨格標本》日本大学生物資源科学部博物館 撮影：比嘉飛鳥

こうした側面からうなづけよう。³⁸⁾

アルドロヴァンディは奇形の動物に格別な関心を抱いていた。彼は『怪物誌…』(1642年)を著しているが、『全偶蹄四足獣誌』でも怪物のような奇形動物について詳細に論じている。本書の奇形動物について五味教授の説明を伺いながら、次のように分類してみた。

第1は自然界においてよく見られるタイプの奇形動物である。例えば、《双頭奇形のウシ》(図18)は頭2つをもつ結合双胎である。このタイプのウシの奇形に似た骨格標本(図19)が日本大学生物資源科学部博物館(神奈川県藤沢)に展示されている。博物館にある双子のウシはそれぞれ背骨を持っているが、結合双胎である。《腹側前部の結合双胎のウシ》(図20)も興味深い奇形動物といえよう。双子のウシだが頭部結合体であり、耳は5本ある。胸腹部も結合しているが、下半身は2体分あるので、前脚は合計4本、後脚4本、尻尾が2本となっている。アルドロヴァンディはテキストの中で、1581年、シチリ



図20 《腹側前部の結合双胎のウシ》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 137) 木版画

138

Vlysis Aldrouandi



図21 《背肢多肢奇形ウシ》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 138) 木版画

ア島で生まれたこの奇形のウシをある見世物師の許で実見したが、「立っている姿は最も美しい怪物として観察した」と述べている。

第2は発生学上、非常に稀なタイプの奇形動物である。例えば《背肢多肢奇形ウシ》(図21)は背中に2本の前脚が余分についている。他に、背中に1本の前脚、側面前部が結合したため、後脚は4本、尻尾は2本という奇形ウシがある(p. 136)。これらの



図22 《ヤギクワガタ》(コンラート・ゲスナー『動物誌』1551-1558年) 銅版画

奇形動物は「異常肢」のいろいろな形態を示していると思われるが、実際に目にすることはめったにない。

第3は神話、寓話、民間伝承、個人的な伝聞によるもので、現代の獣医学的には「キメラ」と見なされる類の動物である。その形をみると、2種類の動物を掛け合わせた生き物である。《ヤギクワガタ》(図23)がその代表的な動物で、昆虫のクワガタの角を思わせる鹿角を持ちながら、ヤギの体の動物である。実はアルドロヴァンディはこの動物の情報を後述するスイスのコンラート・ゲスナーの『動物誌』(*Historiae animalium*, 1551-1558, 1587)(図22)から転載していた。ゲスナーの同書が1658年にロンドンで英訳されたとき、この動物は「シカヤギ」deergoatと翻訳されていた。

『オックスフォード・ラテン語辞典』によると、怪物 *monstrum* は「不自然な事物、前兆として見なされる出来事、前触れ、奇異な現象、徴候」という説明があるように、³⁹⁾ 当時は怪物のような奇形も何らかのメッセージつまり「前兆」と解されたようだ。ではアルドロヴァンディは奇形動物をどう考えていたのだろうか。

アルドロヴァンディはウシ、ヒツジ、ヤギの奇



図23 《ヤギクワガタ》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p. 858) 木版画

形に大きな関心を抱き、それらの出現をなんらかの「徴候」または「前兆」として捉えていた。彼はイタリアだけでなく、広くヨーロッパから様々な情報を収集していた。すでに15世紀末、ドイツ人ハルトマン・シェーデルの『ニュルンベルクの年代記』(1493年)にもさまざまな怪物、例えば、胸に両目があったり、馬顔で角のある動物、頭部や胴体を共有する奇形の生き物が描かれている。さらに16世紀前半のドイツでは、しばしば一枚刷りの木版画でこうした奇形動物の誕生がセンセーショナルに伝達された。胴体の繋がった女兒、2つの体躯で頭部を共有した奇形の動物などが、何時、何処で、誰の許で生まれたか、それは神のいかなるメッセージかなどをテキストで伝えていた。一例をあげると、リュネブルクで発見された《奇形の黒ヒツジ》(図24)について、以下の内容が語られている。「キリストは自らの犠牲によって人類をその原罪から救済するためにこの世に來られた。ここでは羊(子羊としてのキリスト)の代わりに、異常な生き物、つまり4つの耳、8本の脚を持ち、猿顔で黒く、醜い羊が生まれた。この動物は蟹のように後向きに歩く。無害で寡黙で理性をもたない生き物であるが、神はこの怪物でわれわれ人間の邪悪で堕落した本性を見せようとしている。人間は神の子羊、キリストに従うべきであり、悪魔を選んではいけない。彼こそ、黒く、恐るべき雄である。」文中では奇形動物の出現は神からの警告のメッセージとして伝えている。この図版によく

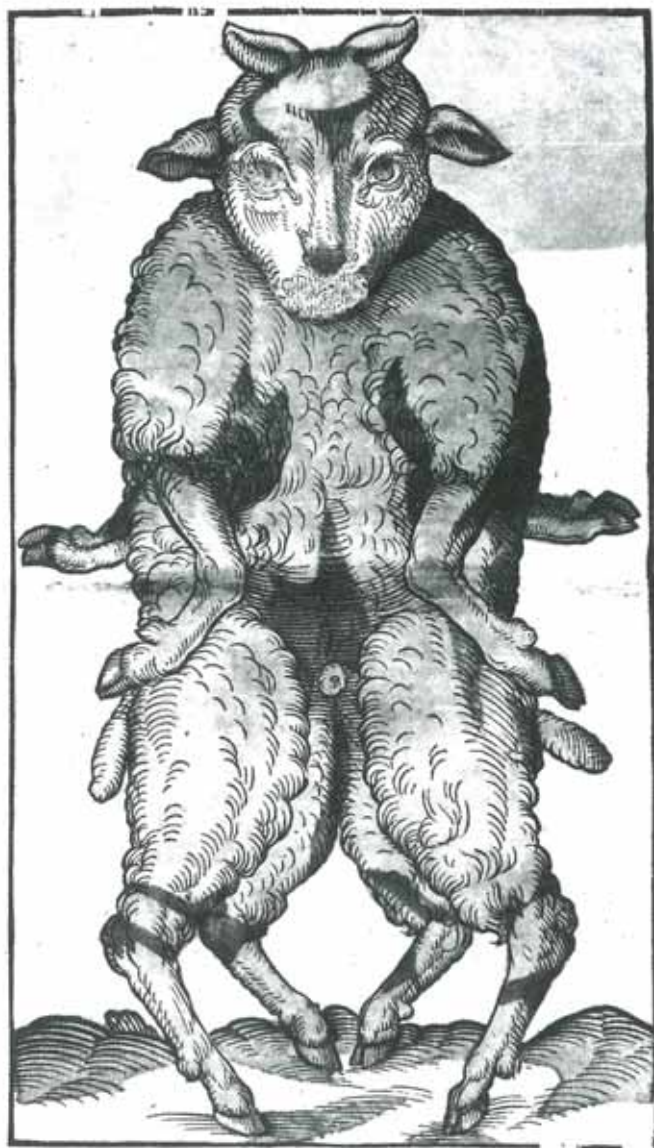


図24 《奇形の黒ヒツジ》16世紀前半 木版画

似た奇形動物として、前述した《腹側前部の結合双胎のウシ》(図20)を挙げられる。だがアルドロヴァンディはどのような前兆や予兆を語っていたのであろうか。まず古代ローマで神官たちが占った動物の内臓占いに触れている。例えば、カエサルが死ぬ直前、ある牛を畜殺したら、心臓がなかった。犠牲に捧げようとしたウシが逃げ出したり、啼くのは悪い予兆である(p. 126)。アルドロヴァンディは「われわれキリスト教徒にとってこのような内臓占いは迷信で空虚なことだ」(p. 127)というふうに批判した。しかしアルドロヴァンディは驚異的な超常現象に関しての情報を積極的に伝達しようとした。例えば、ウシが人間の声で話した例。雄のウシが生まれたら、そのお腹に別の子ウシが入っていた例。ウシが建物の中に入り、階段を上がっていった例。後者に関し「戦争の予兆」と述べている。この他、かなり具体的な例として1551年、バーゼルで5本脚のウシが生まれ、見世物師がそれを各地で巡回して興業し

たが、翌年、トリエントの公会議が分裂し、中断した(フランス王アンリとザクセン選帝侯の裏切り行為が原因らしい)など。

Ⅲ-3 範例となった挿画について

本書でアルドロヴァンディが68点の木版挿画の挿画を掲載したとき、数知れぬ先人たちの文献と図版を参照していた。したがって他の文献の挿画の模写、多少の変更、応用など、さまざまな「転載」が見られる。その顕著な作例の一つが前述したコンラート・ゲスナーの『動物誌』の《ヤギクワガタ》(図22)であった。⁴⁰⁾ ほかに両書の偶蹄四足獣を比較してみると、いくつかのゲスナーの画像が踏襲されていることが分かる。筆者の調査によれば、水牛の頭部と頭蓋骨(図25、図26)も適切な比較例となろう。そのほかアルドロヴァンディはいくつかの挿画(牛 p. 355, 356, 364, 山羊 p. 736, 鹿角 p. 857)をゲスナーの『動物誌』の図版から転載している。両博物学者を比較すると、アルドロヴァンディは動物学分野ではゲスナーよりもはるかに詳細であるが、ゲスナーの方が批判主義的、分類的な面で優れているといわれてきた。だが1989年、クリスタ・リード＝ドルンの『学問と寓話的存在——コンラート・ゲスナーとウリッセ・アルドロヴァンディに関する批判的研



図25 《水牛、前頭骨とその角突起》(コンラート・ゲスナー『動物誌』1551-1558年)

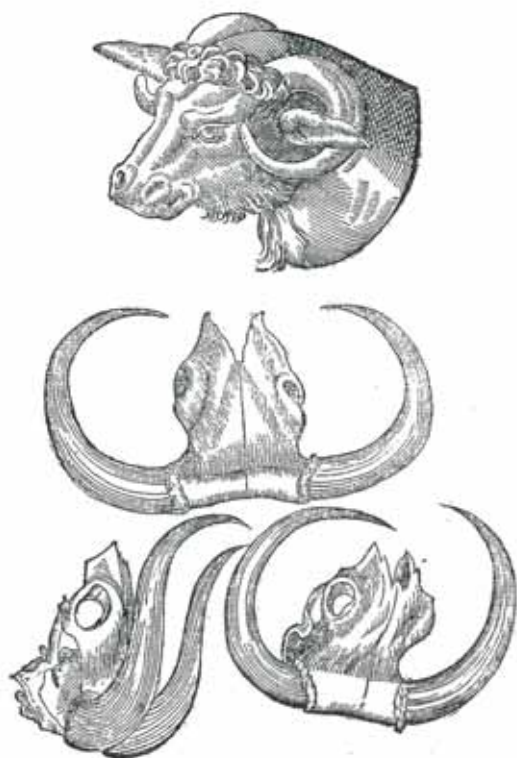


図 26 《水牛、前頭骨とその角突起》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』 p.361)

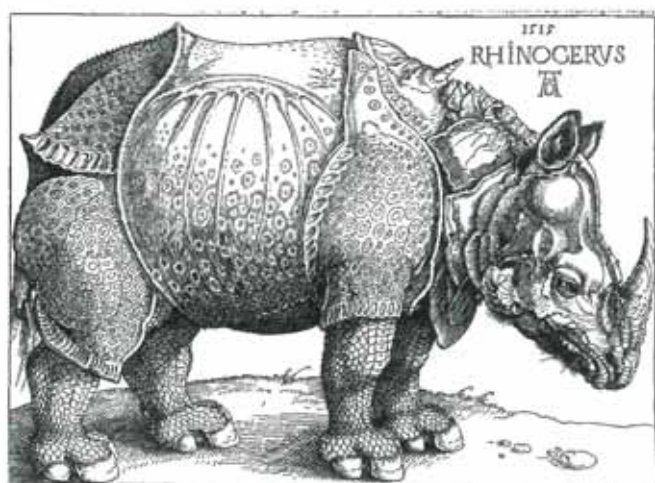


図 27 デューラー《インドサイ》1515 年 木版画



図 28 《インドサイ》(コンラート・ゲスナー『動物誌』 1551-1558) 木版画

究』⁴¹⁾ は両博物学者をそれぞれの生涯、動物研究の方法論、研究の源泉、図版の出典、観察、記述、解剖学および実験的研究などの側面から詳細に比較し、かつそれぞれの業績に新たな位置づけを行った。アルドロヴァンディの方が古代、中世、同時代の人文主義者の文献により精通し、より広範囲に引用しているという。確かにゲスナーの『動物誌』もアルドロヴァンディの『全偶蹄四足獣誌』も既存の中世写本や15、16世紀の出版物から図版を踏襲した場合も少なくない。だが両者とも実物を写生画に残し、ゲスナーは約150点、アルドロヴァンディはその20倍の約3000点を所蔵した、といわれている。ゲスナーが起用した画家はルーカス・シャン (Lukas Schan)、ハンス・アスバル (Hans Asper)、ヨーゼフ・ムーレル (Joseph Murer)、ハンス・トーマン (Hans Thomann) 他、モノグラム D. K. でしか知られていない画家もいた。⁴²⁾

周知のことは、ゲスナーのインドサイ (図28) はアルブレヒト・デューラーの木版画 (図27) からの模写である。アルドロヴァンディは《インドサイ》(図30) で、デューラーよりはゲスナーを使用した。



図 29 《インドサイ》16 世紀末 テンペラ ©ボローニャ大学

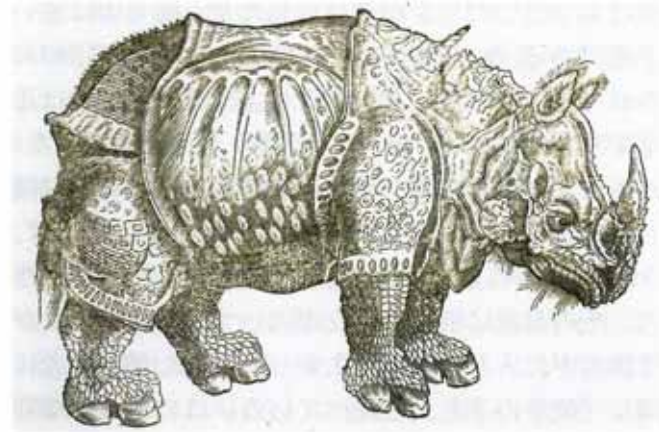


図 30 《インドサイ》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』 p. 884) 木版画

というのもデューラーの《インドサイ》は非常に緻密な線刻によって須毛（ひげ、胸垂（顎に近い部位）、背部、尾毛などが表現されているのに対し、ゲスナーのサイの描写はデューラーを模写したとはいえ、かなり荒く、省略的であり、その意味で、ゲスナーがアルドロヴァンディの手本となったことが分かる。

留意しなければならないのは、デューラー自身、インドのクジャラート王が1515年、ポルトガル王エマヌエルに献呈したインドサイを目撃したわけではなく、彫版師ヴァレンティーン・フェルディナントのスケッチを写し、それに基づいて一枚刷りの木版画（図27）を制作したのである。とりわけデューラーは、自身の想像力も膨らませ、このサイに甲冑を着ているような皮膚構造を与え、本来はないはずの角を背中に一本加えた。佐藤直樹の論文によれば、さらにデューラーは彼自身の版画の銘文にも記しているように、当時の人びとのサイのイメージすなわち「素早く、勇敢で狡猾」をエンブレム的な性質と見なし、サイの描写に盛り込んだという。⁴³⁾ こうしてデューラーの《サイ》は繊細で緻密な技法と、「見せかけの写実主義」（佐藤直樹）の相乗効果もあり、同時代および後世の手本として広く伝搬したのである。確かに、デューラーのサイのインパクトのある皮膚構造は見る者にこの動物が甲冑を着て、天敵から防御していると誤解させたようだ。そのためアルドロヴァンディの画家がサイをテンペラで描いたとき、サイの体全体をピンクや赤で彩飾し、華やかな甲冑で覆ったのである（図29）。しかし結果的に、アルドロヴァンディの本で挿画になったときは、この彩色画からでなく、ゲスナーの木版画を直接、模倣していた（図28）。他方、デューラーと同時代のドイツの画家ハンス・ブルックマイヤーもフェルディナントのスケッチを実見したようだが、彼の《サイ》はフェルディナントのスケッチ通りに木版画化されていたことは、現代のインドサイの写真との比較からも分かる。しかしデューラーのような迫真性に欠いていたため、後世、手本とされることはなかった。

Ⅲ-4.『全偶蹄四足獣誌』のための彩色画（水彩・テンペラによる写生画ないし構成画）と木版画との関係

本書の購入後、筆者は2013年10月25日にボローニャ大学アルドロヴァンディ博物館と同大学図書館写本室を訪れた（本稿のVに後述）。写本室で1日1冊のみ閲覧許可という厳しい制限ではあったが、アルドロヴァンディが描かせた画家たちによる水彩・

テンペラ画のアルバムを調査することができた。画家たちの技量には差があるものの、保存状態の良好なオリジナルの作品には独特の迫真性があり、色彩的にも非常に美しかった。アルドロヴァンディは画家たちに対し、芸術的な創造性ではなく、対象物の忠実な写生が重要であると説いてはいるものの、中にはきわめて芸術的に水準の高い作品もあった。個々の彩色画（イタリア語で単数形では「ターヴォラ」*tavola* と呼称）は透明水彩（水性の強いテンペラともいう）とテンペラの混合技法といわれている。多くの彩色画の余白に専門家の手によって動植物の名前が数か国語で記載されていた。これらのアルバムはinternetで公開されている。⁴⁴⁾

帰国してから学生さんと手分けして、『全偶蹄四足獣誌』の68点の木版画に一致する彩色画を探した。その結果、かなりの数の偶蹄四足獣を特定できた。当然ながら木版画は彩色画とは左右逆の構図である。アルドロヴァンディは奇形の動物に強い関心があったので、手本となった彩色画と木版画を比較すると、彩色画ではやさしい子ウシの顔が木版画ではいかめしい顔となり、身体を覆う毛が木彫の線で強調されていることも明白となった。また水彩画やテンペラ画では緑の草むらに黄色の花が描かれ、グロテスクな印象を和らげている。

既述したように、アルドロヴァンディの周囲には動物、植物、鉱物などの実物や剥製を写生したり、他の文献にある版画を模写する画家、それを版木の上に転写する素描家、実際に彫る木版画家という芸術家集団がいた。しかも、銅版画と思わせるほど精密な木版画もあった。またアルドロヴァンディは博物学の著書には挿画が絶対に必要であることを強調し、挿画の全くないアリストテレス、テオフラストゥスやプリニウスの博物誌を凌駕しようとした。しかし彩色画にはサインがないため、制作者の名前は容易には同定できないことも多い。例えば、虹色の身体をもつ《トビウオ》（図31）は日本画を思わせる繊細な筆触と鮮やかな彩色で目を見はらせる。ときには研究者による様式的な分析やアルドロヴァンディの残したドキュメントから、彼に仕えた著名な画家たち、素描家、彫版者たちの名前がある程度知られるようになった。⁴⁵⁾ 例えば、フランクフルト出身の素描家コルネリウス・シュヴィント（Cornelius Schwindt）、フィレンツェ出身の画家ロレンツォ・ベニーニ（Lorenzo Benini）、ヴェローナ出身の画家ヤコポ・リゴッツィ（Jacopo Ligozzi）、同じくヴェローナ出身の画家ジョヴァンニ・デ・ネー

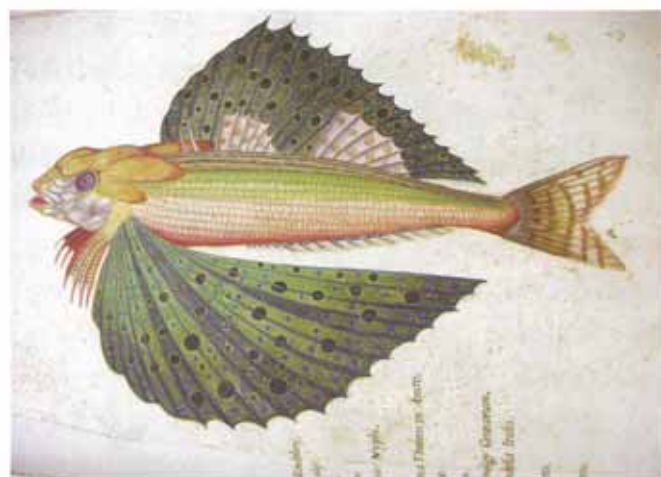


図31 《トビウオ》16世紀末 テンペラ©ボローニャ大学図書館 筆者撮影

リ (Giovanni de' Neri 彼は1558-90年の間、アルドロヴァンディに仕えた主要画家)、ニュルンベルク出身の彫版師クリストフォロ・コリオラーノ (独名クリストフェル・レーデレル) らである。彼らはハイレベルの作品を残し、それに基づいた版画が挿画になった。多くの画家たちはアルドロヴァンディの生前、没後も含め、30年近く彼の家から支払いを受けていた。これらの画家の中でもリゴッツィは著名であるが、彼はアルドロヴァンディのために優れた動植物画を制作した (2014年5月から9月までフィレンツェのパラティナ美術館で大規模なリゴッツィ展が開催された)。和田咲子によれば、リゴッツィはアルドロヴァンディから影響も受けたという。例えば、リゴッツィは《パッションフラワー》の制作に際し、「蕾の状態、開花した姿、花が枯れて種子がなくなるまでの様子」を描いているが、それはアルドロヴァンディのつぎの主張に啓発されたのであろう。「自然の忠実な模倣には画家も詳細な専門知識が必要、その意味で挿絵は学者と画家の共同作業であり、新鮮な対象物の獲得が肝要となる。」⁴⁶⁾

上記の芸術家の中でコリオラーノはアルドロヴァンディの家に常住し、15年以上、彼の著作のために銅版画や木版画を制作した。ある時、コリオラーノがアルドロヴァンディの家から送ったトスカーナ大公フェルディナンド1世宛ての手紙 (1590年6月9日付) の末尾に「ドイツ人の版画家 Cristofano」と署名していた。アルドロヴァンディが奇形動物を画家に描かせるとき、ニュルンベルク出身のコリオラーノは図24のような自国ドイツで発行された奇形動物の一枚刷り版画的購入に一役買ったかもしれない。

こうしてみると、アルドロヴァンディの豊富な挿

画入りの著作は科学と芸術の秀でたコラボレーションといえよう。

アルドロヴァンディがパレオッティ枢機卿に宛てた手紙 (1582年11月4日) によれば、当時のボローニャの画家たち、例えば、ロレンツォ・サバティーニやオラツィオ・サマッキーニが歴史画の中で動植物を描くとき、アルドロヴァンディの許を訪れ、彼の専属の画家たちが描いた膨大な自然物の写生画を見たり、模写したらしい、という。⁴⁷⁾ このようなアルドロヴァンディ自身の証言からイタリアだけでなく、外国の画家たちもボローニャの「博物学の殿堂」の評判を聞き、数時間いや数日かけて絵画的メモを取ったことも容易に想像できるだろう。実際、アルドロヴァンディは「展示室にある自然物を毎日、あらゆる人びとが訪ね、観てもらっているのだ」⁴⁸⁾ と語っていたように、一般人にも公開していたのである。とはいっても、彼は新大陸アメリカからの標本を始め、新しいコレクションの入手情報や動物、植物の標本の保存法など、数多くの専門家からの助言を必要としていた。もちろんそれらの中には動物の角、羽根、尻尾、牙といった部分だけの場合も少なくなかった。さらに古代ギリシャ、ローマ時代、あるいは中世や同時代を通じての膨大な文献を参考にしたことはいうまでもなく、彼の読書の「履歴」はページの余白に記された出典から知ることができる。ときには読者の便のために余白に内容項目を示したとも考えられる。コレクションの充実のためになによりも大切なのは、アルドロヴァンディの研究に熱心な関心を示し、コレクションの購入費用を支援してくれる君主たち、例えば、トスカーナ大公でメディチ家のフランチェスコ1世やフェルディナンドなどのパトロンが存在であった。⁴⁹⁾

IV. アルドロヴァンディの博物学とフランドル絵画との関係

アルドロヴァンディを研究していると、筆者の専門である16、17世紀フランドル絵画との関係が浮かび上がってくる。つまりコンラート・ゲスナー、カルロス・クルシウス、アルドロヴァンディの博物学とフランドルの画家たちにはある共通する世界観があるのではと考えるようになった。ピーテル・ブリューゲルの次男ヤン・ブリューゲルは《動物のいるアダムとエヴァの楽園》、《4大要素》 (水、火、大地、空気の寓意)、《オルフェウス》などで、1つの画面に多種多様な動植物を博物誌的に描いている。リケンとスミスの研究によれば、ヤン・ブリューゲル



図32 ヤン・ブリューゲル《空気》1621年 油彩 パリ ルーヴル美術館

ルの《空気》(1621年、図32)には、オウム、ダチョウ、ホロホロチョウ、クジャク、オオライチョウなどの67種類の鳥が描かれている。この二人の研究者はとりわけカルロス・クルシウスの『エキゾチックな動物誌』(1605年)からヤンがフウチョウ(極楽鳥)、クジャク、マゼラン海峡のペンギンなどを参照

していると指摘した。⁵⁰⁾とするとヤンが《水の寓意画》で百科全書的に水生動物や貝類を描いたとき、アルドロヴァンディの『無血動物論』(1605年)や『魚類論』(1612年)などから魚介類の画像情報を得た可能性も考えられる。ヤンは6年余りのイタリア滞在中(1589年頃-96年)、ローマで枢機卿フェデリコ・ボッロメーオと知己になり、ミラノでは同枢機卿の庇護を受け、1595年から96年にかけて彼の許に滞在した。前述したようにボッロメーオはアルドロヴァンディの重要なパトロンでもあった。したがってヤンがボッロメーオの薦めでボローニャのアルドロヴァンディのコレクションに接することは想像でき

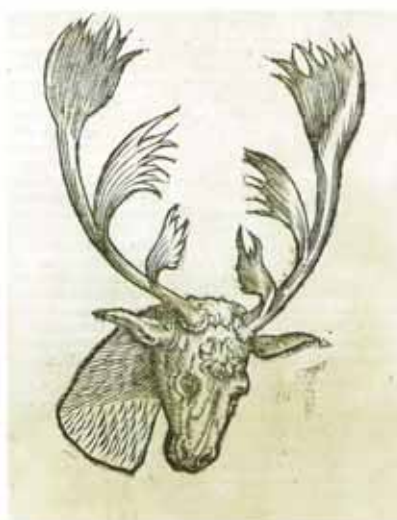


図34a 《ヘラジカ》(アルドロヴァンディ『全偶蹄四足獣誌』p.857) 木版画



図34b 《シカ》(同書p. 741) 木版画

ンブラス城の階段や上りスロープに見られる」(図34b)、と述べている。⁵¹⁾アンブラス城はインスブルックにあるフェルディナント二世大公の城館だが、この地方にこうしたシカが生息していたのであろう。

ただし現代の著者の中にはアルドロヴァンディのヘラジカは当時生育していたシカに多少の空想を加えられているのではと推測する研究者もいる。⁵²⁾つまりアルドロヴァンディの時代、著者たちがまだ実見しない動物を記述するとき、古代の著述物、他の博物学者の文献、種々の伝聞情報に基づいている場合も少なくないからである。本稿では原書通りの動物の名前の表記は、読者に分かりにくいこともあ

よう。

『全偶蹄四足獣誌』との関係でいえば、ヤン・ブリューゲルの《森の中の死んだ動物たち》(1620-27年、図33)で、前景で斃れて横たわるシカ(ダマジカ?)は掌に指が生えたような角をもっているが、アルドロヴァンディの《ヘラジカ》(図34a)によく似ている。だがアルドロヴァンディは別のテキストの中でも巨大なシカの角が「ア



図 33 ヤン・ブリューゲル《森の中の死んだ動物たち》1620-27 年 油彩 サンクトペテルブルク エルミタージュ美術館



図 35 ルーラント・サヴァレイ《天国》1625 年頃 油彩 ミュンヘン ニュンフェンブルク宮殿 (バイエルン州立絵画コレクション)

り、ボローニャ大学を中心とするアルドロヴァンディ研究者たちの表記を参考にした。

とりわけ動物表現を得意としていたルーラント・サヴァレイの《森のある山岳風景と動物たち》(1624年)や《天国》(1625年頃、図35)でも、この種のシカ(ダマジカ?)が前面の最も目立った場所に位置している。ヤン・ブリューゲルは自国のマリモン城、サヴァレイはアンブラス城で同種のシカを見る機会があったのであろうか。したがって特色のある角のシカに関して、これらの画家たちがアルドロヴァンディの著書や動物彩色画から直接の影響を受けたというよりは、画家たちもアルドロヴァンディもこのとりわけ珍しい掌状型のシカに興味を抱いたことに注目したい。

ヤン・ブリューゲルの動物や植物は確かに彼の神業とも思われる優れた描写力が創り出したものである。それは自然の再現を目指す職業画家たちによる、事物の忠実な写生以上のものがあつた。つまりカトリック改革の推進役ボッロメオ枢機卿や彼の友人であるパレオッティ枢機卿は信徒たちの宗教教育の一貫として、優れた画家の高度な芸術の力を期待した。枢機卿たちは画家たちが神の偉大なる御業である動植物に新たな生命を与え、「聖なる創造」を感動的に表現することで、信徒たちの神への崇拜を一層高揚させることができると考えた。⁵³⁾

同時代のサヴァレイは《ノアの洪水後の動物の下船》で、エキゾチックで珍しい動物を集わせているが、アルドロヴァンディの博物学的探求に共通する側面があるように思える。確かにヤン・ブリューゲルはブリュッセルの宮廷動物園で、サヴァレイはプラハの宮廷動物園で生きた動物を実際に観察し、度々スケッチをする機会もあつただろう。さらに画家たちがアトリエで描くとき、動物の生態を詳しく描写した博物誌の挿画を手本としたことも容易に推測される。

ペーテル・パウル・ルーベンスの数多くの動物画との関係については、アントウェルペンで国際的な書籍発行・印刷業を営むプランタン社の業務日誌から、ルーベンスが1613年に、アルドロヴァンディの全三分冊の『鳥類誌』ほか、『昆虫論』『魚類論』を購入したことが知られる。なおルーベンスの息子アルベルトの書庫にはアルドロヴァンディの全著書が所蔵されていたといわれる。1621年に出版された『全偶蹄四足獣誌』とこれらのフランドル画家との関係については今後、研究を進めなければならないだろう。

ヤン・ブリューゲルの孫にあたるヤン・ヴァン・

ケッセル(1626-1679年)はヤンの娘バスハシアとヒエロニムス・ヴァン・ケッセルの息子であるが、彼は昆虫やアマガエルの優れた写生画を描いている。例えば、ひとつの画面にサナギを含め、約50種類の蝶々と昆虫を油彩で仕上げているが(1671年、図37)、まさにアルドロヴァンディの自然観察と記録の精神に通じるものがある。アルドロヴァンディの画家もまず蛹を詳細に描き、次いで同じ蝶の前面と背面を写生している(図36)。さらにヤン・ヴァン・ケッセルの《鳥のコンサート》(図39)は全くユニークな構図で、昼間は目の見えないフクロウが指揮者になって鳥たちを歌わせる、つまり能力のないリーダーに従う無知な民衆への諷刺作品である。この画面に登場する約20種類の鳥たち、例えば、クジャク、オウム、インコ、オオハシ、アップル・フィンチ、ハクチョウ、サギなどを見ていると、ヴァン・ケッセルはアルドロヴァンディの彩色画の精神を継承しているだけでなく、少なくとも『鳥類誌』の木版画(図38)に接する機会があつたのではと想像できよう。アルノルト・ハウプラーケン『オランダの画家の大劇場』(1718年)で、ヤン・ヴァン・ケッセルについてこう述べている。「この画家は(誰もが彼の生まれながらの性格を理解する)やさしい自然が生み

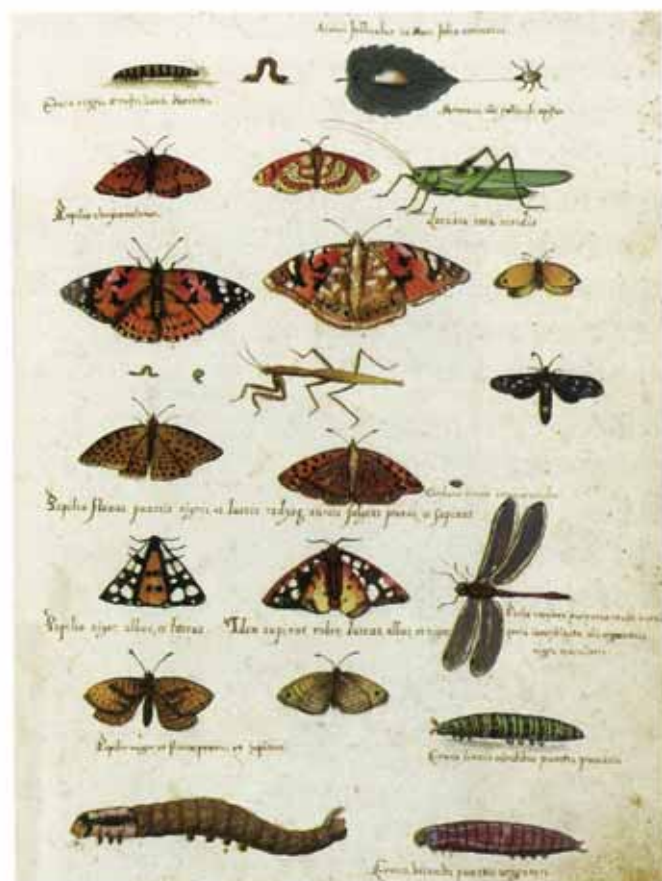


図36 《多種の蝶と昆虫》(アルドロヴァンディ『昆虫論』1599-1603年) ©ボローニャ大学図書館



図37 ヤン・ヴァン・ケッセル《多種の蝶々と昆虫》1671年 油彩 個人蔵

出すあらゆる種類の花、また羽根をもたない動物、底なしの海、陸上の小さな生き物を描くことに集中したが、ヤン・ブリューゲルがきつとなし得たと同じように、細部にこだわり、優れた技術で、巧みに仕上げていた。⁵⁴⁾

以上の点から17世紀のフランドルの画家たちのほうが同時代のボローニャの画家たちよりもアルドロヴァンディの博物学的精神に近い作品を残しているのではなかろうか。ボローニャの画家たちの表現世界は人物を中心とした宗教的な主題が多く、画面の中の動植物を前述したヴァン・ケッセルのように実物そっくりに描く習慣はなかったようだ。確かに彼らはアルドロヴァンディの著書や彼に仕えた画家たちの彩色画を知っていた。だがジュゼッペ・オルミが述べるように、彼らはそれらの世界に完全に“密着”し、盲目的に模倣することはなかった。他方「ボローニャで芸術活動をする人びとが着想やインスピレーションのためにアルドロヴァンディに注目するという選択をしなかった」とは言い難いだろう。⁵⁵⁾

アントウェルペンとボローニャの関係についても注目したい。前述したように、アルドロヴァンディは16世紀後半、博物学者としてボローニャ大学で教

鞭をとり、執筆活動をしたが、その頃、フランドルの人文主義者たちがボローニャを訪れ、同地の医師・法律家・哲学者スキピオ・ファビウス、アルドロヴァンディなどと交友していたことが知られる。例えば、フランドルのアブラハム・オルテリウスは世界的に名声の高い地図制作者であるが、彼の紹介でブリューゲルがイタリア旅行（1552年から数年間）の途上、同郷の画家マルテン・デ・ヴォスとともに、ボローニャでファビウスを訪れたらしい。ファビウスがオルテリウス宛の手紙の中で「マルテン・デ・ヴォスや、私にとって同じく親しかったピーテル・ブリューゲルがどうしているか知りたいものです」（1561年6月16日）といった内容の手紙を書き送っているからである。⁵⁶⁾

ファビウスとアルドロヴァンディは医学の道では同業者であったが、ボローニャの哲学教授のポストを争ったライバル同士だ。彼はアルドロヴァンディ一族と姻戚関係でもあった。⁵⁷⁾ 1550年代前半のアルドロヴァンディの蒐集活動はまだ初期段階であったとはいえ、ファビウスがブリューゲルやデ・ヴォスに「自然の驚異」のコレクションを始めたアルドロヴァンディを紹介した可能性も考えられないだろうか。

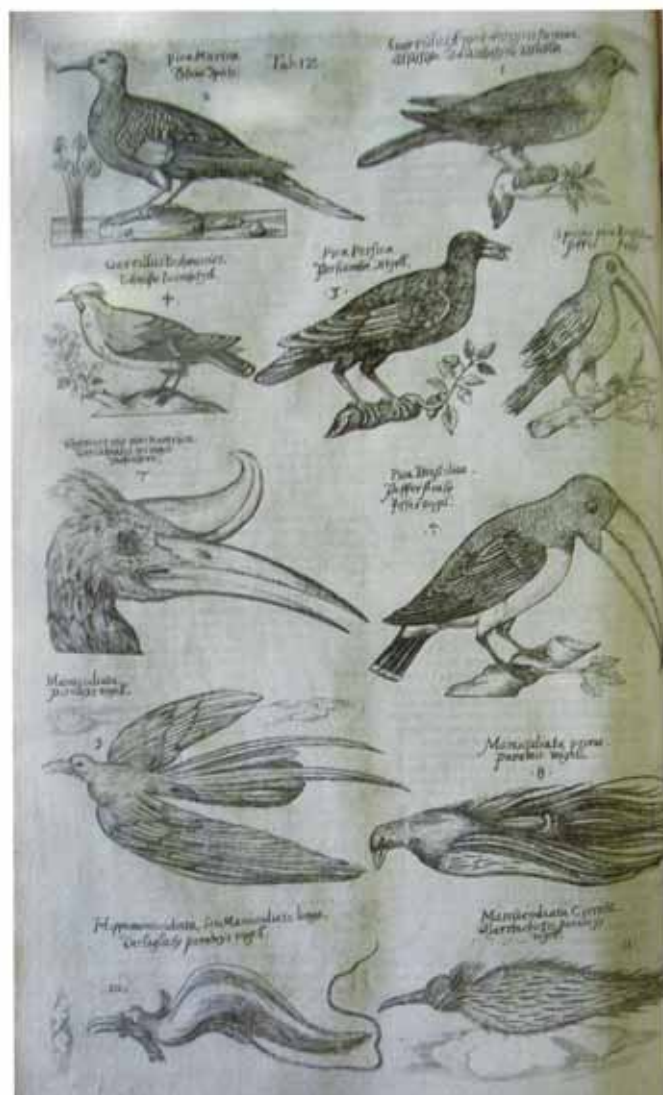


図38 《多種の鳥》(アルドロヴァンディ『鳥類誌』1599-1603年) ベルギー王立図書館 筆者撮影

ティネ・ルーク・メハンクの最新の研究によれば、オルテリウスはその後、古代エジプトの遺物や挿画のコレクションなどを蒐集するファビウスに、彼が制作した《古代エジプトの地図》(1565年頃)を献呈している。⁵⁸⁾ オルテリウスはボローニャでファビウスだけでなく、アルドロヴァンディを訪れた可能性も高いだろう。この点についても、メハンクはオルテリウスが植物や動物描写の天才であるフーフナーヘルを伴って、アルドロヴァンディのコレクションを訪れたのではと推測している。もしアルドロヴァンディがフーフナーヘルの「四要素」シリーズ(1572-92)の《火》に描かれたような、見事な昆虫表現が見たら、彼を雇用したかもしれないという。⁵⁹⁾ しかしオルミも述べているように、こうした推論は慎重にしなければならないだろう。⁶⁰⁾

ここで、アントウェルペンでも16世紀後半から17世紀にかけて、いかに人文主義者たちの間で博物誌的な関心が高まっていったかを述べてみよう。何よりも当時のネーデルラントの為政者カルル五世をはじめ、彼の側近でメッヘレン大司教アントワヌ・ベレノ・ド・グランヴェルらの熱心な博物誌的コレクション(新大陸や熱帯の珍獣の剥製、稀有な岩石、貝殻、宝石など)が注目される。⁶¹⁾ 印刷物に関し、出版業者クリストフ・ブランタンは後述するピエール・ブロンがバリで出版した博物学研究をアントウェルペンで刊行(1560年)。国際的な版画出版業者ヒエロニムス・コックは壁掛け用サイズ(935×950mm)の



図39 ヤン・ヴァン・ケッセル《鳥のコンサート》1657年 油彩 個人蔵



図40 ピーテル・ブリューゲル《反逆天使の転落》1562年 油彩 ブリュッセル ベルギー王立美術館

新大陸の地図《アメリカ》(1562年)でパタゴニアの人食い人種、海洋でのトビウオ、海馬、海獣を挿入している。⁶²⁾ アドリアーン・コーラルトが彫版したマールテン・デ・ヴォスの「4大陸」版画シリーズ(1589年)ではアフリカのワニ、アメリカのアルマジロなどがフランドル文化圏に紹介されている。コックの未亡人は1600年頃、コーラルトの下絵に基づく、鳥類、魚類、動物シリーズを発行していたが、とりわけエキゾチックな動物を描写した19点の版画シリーズは同時代の画家の「アダムとイヴの楽園」や「洪水後のノアの動物たちの上陸」などの格好のお手本となった。他にもランベール・ロンパール、ハンス・ボルの動物の素描アルバム、ハンス・ヴェルハーゲン、ヤコブ・サーヴァレイ、フランス・スナイデルなど動物画家たちの活躍も、人々の博物誌への強い興味を助長した。

筆者がボローニャ大学付属のアルドロヴァンディ美術館を訪れ、展示品の中にフグの剥製、とりわけ体を膨らませて敵を撃退する姿をみて、ブリューゲルの《反逆天使の転落》(1562年、図40)の上部右に描かれた空を飛ぶユーモラスなフグを想起した。フグの生息地は主として東南アジアやアフリカである



図41 ブリューゲル「ワニ風の怪物」(図39《反逆天使の転落》の部分)

ため、フランドルでは珍奇な「見世物」だった。そのため歯をむき出し、羽根のように大きなヒレつきのフグを画面に登場させることで観者の目を引きつけている。またブリューゲルが同作品で叛逆天使の一人を大きなワニ風な怪物(図41)で描いているが、同様の爬虫類の剥製(図46)がアルドロヴァンディ博物館に展示されていた。アルドロヴァンディの画家が描写したこの動物の彩色画も現存している。こうした類似性はおそらく偶然であろう。とりわけブリューゲルが新大陸に生息する動物にも関心を示し、この作品に南アメリカに生息するアルマジロや南アメリカと中央アメリカのナマケモノを描いたことは上述したアントウェルペンの博物誌ブームと深い関連性があるのだろう。だがブリューゲルは転落した天使の一人をアルマジロの体で描き、甲冑を着せ、長いランベットを吹く人間怪物に仕上げるなど、あくまでも異国の珍獣を怪物表現のために使った。

ブリューゲルとアルドロヴァンディの関連に初めて着目したのは前述したメハンク博士で、2014年11月に出版された彼女の著書に詳述されている。⁶³⁾

メハンクはその研究の中で、ブリューゲルがアルマジロについての知識を得た背景には、この動物の図とその説明のある、ピエール・ブロン『数多くの記憶すべき特異性とその事物の観察』(1553年、パリ)があり、とくにプランタンがこの書を1555年、アントウェルペンでも発行したと関連づけている。さらにゲスナーの『動物画像論』(1560年)にもアルマジロの挿画があると指摘した。⁶⁴⁾ 他方、アルドロヴァンディもこうした新大陸の動物の剥製入手のために奔走をし、彼の画家に実物を忠実に写生させた。

こうしてみると、ボローニャから帰国したブリューゲルが一つの画面に多種多様な爬虫類、鳥類、魚介類、怪物、熱帯植物などを「づくし的」に密集させるという手法は、アルドロヴァンディの展示室と共通する博物誌的な着想と考えられないだろうか。

確かに、ブリューゲルのアルドロヴァンディ自邸の訪問は単なる推測の域を出ない。またフランドルの画家たちがアルドロヴァンディの工房で制作したという記録はないらしいが、彼らが見学に訪れたこともなかったとは断定できないだろう。メハンク博士も論じているように、16世紀後半のアントウェルペンで執筆活動をしている博物学者たちがアルドロヴァンディを初め、ボローニャの学者との密接な知的ネットワークを樹立していたからだ。当時、アントウェルペンは国際商業都市としての名声があり、

異国からの様々な生きた動物が取引の対象となっていた。生きた珍獣や奇形動物の見世物小屋もあったらしい。異国の動物、例えば尾長猿などをペットとして飼う市民もいた。そのためフランドルではサヴァレイ兄弟のように動物を得意とする画家たちが活躍し、彼らの作品には珍奇さとエキゾチズムの付加価値がつけられた。プランタンはアルドロヴァンディの書籍を販売していたことも知られている(本稿の「はじめに」で言及したルーベンスの例のように)。つまりアントウェルペンは北ネーデルランドの重要な博物学研究の拠点となっていたのである。

V. アルドロヴァンディ博物館

Museo di Ulisse Aldrovandi, Bologna, Palazzo Poggi

Via Zamboni 33, 40126 BOLOGNA, Italy

+39 051 20 99 398

現在の博物館のコレクションは年譜で触れたように、アルドロヴァンディが生前に行ったボローニャ市議会との遺贈の契約に遡る(1603年)。彼のコレクションがPalazzo Pubblico(現在の市庁舎)内にミュージアムとして公開されたのは、彼の没後12年を経た1617年で、6室に展示された。さらに前述のように、1657年にフェルディナンド・コスビ伯のコレクションも加わった。1742年以降は同市のPalazzo Poggi科学研究所に移設されている。だが18、19世紀にアルドロヴァンディ・コレクションの大半が分散してしまった。というのも1796年中期、フランス軍がボローニャに進攻、翌年同市はフランスの衛星国チザルピーナ共和国に併合されたからである。科学研究所がナポレオンの支配下にあったとき、国立研究



図42 アルドロヴァンディ博物館に一番近いボローニャ大学の入り口 Zamboni 通り 筆者撮影



図 43 アルドロヴァンディ博物館展示室 (MPP photos) ©ボローニャ大学図書館

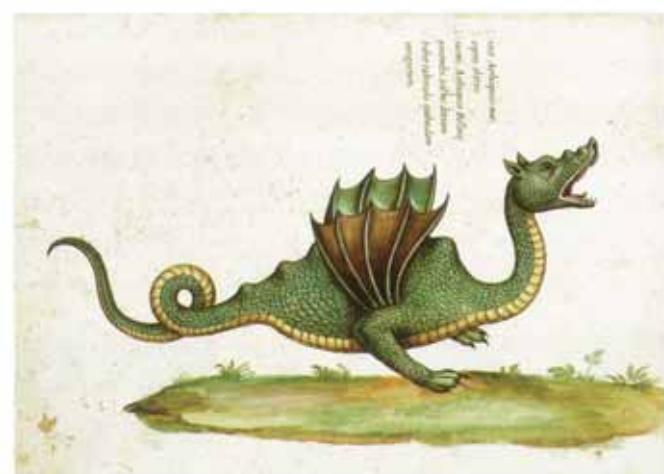


図 44 《有翼のドラゴン》テンペラ 16 世紀末 ©ボローニャ大学図書館

所、美術アカデミア、^{ピナコテーク}絵画館、大学の古代博物館などが設立された。さらに1881年、市立博物館も建設されると、Palazzo Poggi のアルドロヴァンディ・コレクションは様々な博物館や研究機関に分散されることになった。だがようやく1907年、ボローニャ大学の基金で彼のコレクションの再収集と復元が行



図 45 《有翼のドラゴン》版木 16 世紀末 アルドロヴァンディ博物館 (MPP photos) ©ボローニャ大学図書館

われ、以前と同じに Palazzo Poggi でアルドロヴァンディ博物館が再開設されたのである。ボローニャ大学は1563年以降、Palazzo dell' Archiginnasio に主要キャンパスを設置したが、1803年以降、Palazzo Poggi に移転しているので、大学と博物館は同じ敷地内に位置することになったのである。(図42、図43)⁶⁵⁾



図46 《ワニ》剥製 アルドロヴァンディ博物館 (MPP photos)

コレクションのうち、ボローニャ大学図書館写本室 (Sala Manoscritti) にはアルドロヴァンディの手稿類、出版物、画家たちによるテンペラ・水彩画 (図44)、その他の素描、1900点の版画がある。アルドロヴァンディ博物館には著書の挿画のために彫られた1800点の版木 (図45)、鉱物標本、動物の剥製 (図46)、植物園 (Orto Botanico) には乾燥植物の標本が保存・展示されている。

筆者が2013年10月に訪問したとき、学芸員シモーニ・フルヴィオ博士は1574年にボローニャの近郊で農民によって殺された「ボローニャのドラゴン」について詳しいお話をしてくださった。発見時、ボローニャだけでなく、イタリア全土で大評判となり、メディチ家の覇者、高位聖職者、人文主義者だけでなく、一般人からも関心を持たれたが、このときの背景はフィンドレンの書に詳しい。⁶⁶⁾ 実際、アルドロヴァンディはボローニャ・ドラゴンの発見後、すぐに『ドラゴン学』の手稿を残している。

筆者にとって本書の挿画のために制作された多数の彩色画、版木、木版画などは美術史的価値も高く、貴重だ。テンペラ・水彩画に関しては幸いボローニャ大学が500点近い作品を編纂した書物 *Natura Picta Ulisse Aldrovandi* (2007)⁶⁷⁾ で研究することができる。

最後に、アルドロヴァンディに影響を与えた博物学者に注目しよう。彼らはロンドレ (Guillaume Rondelet, 1507-1556)、サルヴィアーニ (Hippolito Salviani, 1514-1572)、ゲスナー (Conrad Gesner, 1516-1565)、ブロン (Pierre Belon, 1517-1564) たちだが、何よりもアルドロヴァンディは、ルネサンス時代における博物学研究の最も偉大な革新者のひとりであり、今後、ますます注目されるだろう。生前没後を通じて刊行された多数の著書は博物学史および近代

自然科学史の中の偉大な記念碑である。

謝辞

本稿を執筆するに当たり、アルドロヴァンディ研究の世界的な権威でボローニャ大学のジュゼッペ・オルミ教授から筆者の様々な質問への詳細な説明、ご自身の論文の送付など、大変親身なご指導をいただいた。筆者の専門外の動物学に関しては日本大学生物資源科学部獣医学科の五味浩司教授から学部連携研究という体制の下で、本書の動物の名称や生態、拙稿のコメントなど、格別なご教示をいただいた。本書のテキストであるラテン語に関し、埼玉大学副学長伊藤博明教授、大妻女子大学の渡邊顕彦准教授に当該箇所の出出や内容の解説をお願いした。17世紀ボローニャで活躍した画家たちについて和歌山大学の高橋健一准教授からご助言をいただいた。何よりも芸術学部図書館戸田浩司課長、山崎恭子課長補佐には図書館にアルドロヴァンディ関係の文献を充実させるための惜しみないご協力をいただいた。掲載図版の中で、図4、29、31、36、43、44、45はボローニャ大学図書館からご提供をいただき (With permission of the University Library of Bologna)、さらにAldrovandi 関係の貴重な学術的情報を頂いた。紙面にて上記の方々に心から感謝の意を表したい。

注

- 1) 本書を『全双蹄四足獣誌』ではなく、『全偶蹄四足獣誌』と訳出したのは論述されている動物の中にウシ、ヤギ、ヒツジ、シカのような第3と第4指の双蹄動物だけでなく、ブタやイノシシのように第2、3、4、5指を持つ4肢の動物も含まれているからである。ただしアルドロヴァンディは本書にサイのような奇蹄動物を例外的に取り扱っているが、本書の動物が角を有していることから、あえて「サイ」を加えたのであろう。
- 2) ポーラ・フィンドレン『自然の占有』伊藤博明、石井朗訳、ありな書房、2005年、p. 46-47.
- 3) Ulisse Aldrovandi, *Aldrovandi on Chickens. The Ornithology of Ulisse Aldrovandi (1600)*: Vol. 2. Book 14, trans. Livi Robert Lind with introduction, contents, and notes, Norman 1963.
- 4) Gian Battista Vai and William Cavazza, eds., *Four Centuries of the Word Geolog: Ulisse Aldrovandi 1603 in Bologna*, Argelato (Bologna), 2003.
- 5) フィンドレン、p. 19. ここでは「単体薬学」と訳さ

- れている。
- 6) この時期の採集旅行の詳細は小林明子「16世紀イタリアにおける自然の蒐集。ウリッセ・アルドロヴァンディの植物図譜をめぐる」遠山公一、金山弘昌編著『美術コレクションを読む』慶応大学出版会、2012年、p. 262.
 - 7) 詳細はフィンドレン、pp. 43-44.
 - 8) フィンドレン、p. 47.
 - 9) Carlo Castellani, "Aldrovandi", *Dictionary of Scientific Biography*, Charles Coulston Gillispie, ed., New York, 1970, vol. 1, pp. 108-109.
 - 10) フィンドレン、pp. 533-605.
 - 11) Giuseppe Olmi and Paolo Prodi, "Art, Science, and Nature in Bologna Circa 1600", *The Age of Correggio and the Carracci*, Washington, New York, Bologna, 1986, p. 217.
 - 12) 『全偶蹄四足獣誌』の索引では、動物のラテン語名がアルファベット順に挙されているが、他に、ヘブライ、カルディア、アラブサラセン、シュメール、ドイツ、ベルガエ(ネーデルラント)、イギリス、ゴート、スコットランド、イタリア、フランス、スペイン語などの表記も記載されていることから、アルドロヴァンディの言語学への知識が広範囲であることが伺われる。
 - 13) Olmi and Prodi (1986), p. 220.
 - 14) 高橋健一「ガブリエーレ・パレオッティの『聖俗画像論』のために」『西洋美術研究』15号、2009、pp. 186-201.
 - 15) Olmi and Prodi (1986), pp. 213-217.
 - 16) Larrine Daston & Katharine Park, *Wonders and the Order of Nature*, New York, 2001, p. 154. 著者は「生きているかのように私が描いた」と訳しているが、アルドロヴァンディが描いているわけではなく、誤訳である。
 - 17) Olmi and Prodi (1986), p. 222. *Guide to the Museo di Palazzo Poggi. Science and Art*, ed. Walter Tega, Bologna, 2001, p. 26.
 - 18) Giuseppe Olmi, "Private Collections and Public Patrimony: The Case of Bologna in the Modern Age", Barbara Marx, Karl-Siegbert Rehberg, eds., *Sammeln als Institution: Von der fürstlichen Wunderkammer zum Mäzenatentum des Staates*, München, Berlin, 2006, pp. 37-38.
 - 19) Giuseppe Olmi, "Ulisse Aldrovandi: Observation at First Hand (1522-1605)", *The Great Naturalists*, ed. Robert Huxley, London, 2007, p. 60.
 - 20) フィンドレン、p. 170.
 - 21) フィンドレン、p. 77.
 - 22) 桑木野幸司「初期近代イタリアにおける博物コレクション空間の特質(2) —U.アルドロヴァンディ(1522-1605)の博物コレクションの分析より—」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)』2002年8月、p. 28.
 - 23) Olmi, 2006, p. 39.
 - 24) 当時、大文字の活字にはUが存在しなかったため、Vが使用された。
 - 25) Alessandro Alessandrini ed Alessandro Ceregato eds., *Natura Picta Ulisse Aldrovandi*, p. 621, Bologna, 2007では"Cura"(編者)というイタリア語が使用されている。
 - 26) ウテルウェリオ、デンプステル、タンブリーニについてボローニャ大学のジュゼッペ・オルミ教授よりご教示いただいた。
 - 27) Aldrovandi, Lodron への献辞、頁の表示なし。
 - 28) Aldrovandi, pp. 404-405.
 - 29) Aldrovandi, p. 870-871.
 - 30) Aldrovandi, p. 870.
 - 31) Aldrovandi, pp. 757-761.
 - 32) Aldrovandi, p. 665. 渡邊顕彦准教授は本稿のためにアルドロヴァンディのラテン語のテキストを訳出し、いろいろご教示してくださった。
 - 33) Aldrovandi, p. 666-667.
 - 34) Aldrovandi, p. 683.
 - 35) Marcus Terentius Varro, *on Agriculture*, London, trans. William Davis Hooper, 1967, pp. 176-177. この出典について、埼玉大学教授伊藤博明氏のご教示を得た。
 - 36) Aldrovandi, p. 683. ただし原文の saepe は saepe の誤植。Horace, *Satires, Epistles and Art Poetica*, trans. H. Rushton Fairclough, London 1970, pp. 368-369.
 - 37) 桑木野幸司『叡智の建築家——記憶のロクスとしての16-17世紀の庭園、劇場、都市』中央公論美術出版、2013年、p. 183.
 - 38) Daston & Park, p. 154.
 - 39) *Oxford Latin Dictionary*, Oxford, 1988, p. 1131.
 - 40) Conrad Gesner, *Historiae Animalium*, Zürich, 1551.
 - 41) Christa Riedl-Dorn, *Wissenschaft und Fabelwesen: Ein kritischer Versuch über Conrad Gessner und Ulisse Aldrovandi*, Wien and Köln, 1989.
 - 42) *Ibid.*, pp. 63-65.
 - 43) 佐藤直樹「デューラーの《犀》——写実とエンブレムのあいだ」『国立西洋美術館研究紀要』1999, No.3,

- pp. 21-32.
- 44) これらの彩色画の画像データは以下の website で表示される。
<http://www.filosofia.unibo.it> 其中で、Tavole acquerellate di Ulisse Aldrovandi が彩色画のサイト。つぎに Consulta をクリック。全体で18巻に分けて公開されている。動物 animali は7冊に分冊されているが、『全偶蹄四足獣誌』の木版画の原画はこの中の数冊に分けて所収されている。
- 45) Giuseppe Olmi et Lucia Tongiorgi Tomasi, *De piscibus: La bottega artistica di Ulisse Aldrovandi e l'immagine naturalistica*, Roma, 1993
 小林明子, pp. 267-270 は図譜の制作工房について詳しい。
- 46) 和田咲子「16世紀フィレンツェにおける動植物画制作の需要と目的」『美術史』2004年10月, pp. 56-57. 和田論文での第2の引用文はアルドロヴァンディの論点を本稿の筆者がまとめた。
- 47) *Scritti d'arte del Cinquecento*, tomo II, Paola Barocchi ed., Milano, Napoli, 1971, pp. 924-925. 高橋健一氏のご好意により、同氏の未発表の試訳を参照させていただいた。
- 48) Olmi, 1986, p. 221.
- 49) アルドロヴァンディのパトロンについて、フィンドレン, pp. 533-605.
- 50) Marrigje Rikken and Paul J. Smith, "Jan Brueghel's allegory of air (1621) from a natural historical perspective", *Nederlands Kunsthistorisch Jaarboek*, 2011, vol. 61, pp. 86-115.
- 51) Aldrovandi, p. 741. この情報はボロニウスの観察によるらしい。Ambras 城に関しては "in gradibus, & ascensu Ambrosianae arcis" と記されていると、Prof. Giuseppe Olmi よりご教示いただいた。
- 52) Biancastella Antonino, ed, *Les Animaux et les Créatures monstrueuses d'Ulisse d'Aldrovandi*, Milan, 2004, p. 227.
- 53) Arianne Faber Kolb, *Jan Brueghel the Elder: The Entry of the Animals into Noah's Ark*, Los Angeles, 2005, pp. 50-51.
- 54) Hendrik J. Horn, *The Golden Age Revisted: Arnold Houbraken's Great Theatre of Netherlandish Painters and Paintresses*, RK Doornspijk, 2000, vol. 1, p. 156.
- 55) Olmi and Prodi, 1986, p. 235.
- 56) Arthur Ewart Popham, "Pieter Bruegel and Abraham Ortelius," *Burlington Magazine*, 59, 1931, pp. 184-188. 森洋子『ブリューゲル全作品』1988年, p. 166, 注11. p. 17.
- 57) Tine Luk Meganck, *Pieter Bruegel the Elder, Fall of the Rebel Angels: Art, Knowledge and Politics on the Eve of the Dutch Revolt*, Brussels and Milan, 2014, pp. 54-55. 本稿執筆中にメハンク氏からメールで以下の情報を提供され、同氏は後に出版した上記の著書注56 (p. 54) で言及しておられる。Pompeo Scipione Dolfi, *Cronologia delle famiglie nobili di Bologna. Con le loro insigne, e nel fine i Cimieri. Centuria prima. Con un breve discorso della medesima città*, Bologna, 1670.
- 58) オルテリウスとファビウスの関係について: Meganck, pp. 54-55.
- 59) オルテリウス、フルナーヘルとアルドロヴァンディの関係の推論: Meganck, pp. 71-72.
- 60) Giuseppe Olmi からいただいたメール (2014.9.12, 9.23, 10.1) によると、アルドロヴァンディは自邸のミュージアムの来訪者名を一冊のノートに克明に記し、中には知られざる画家たちの名前も多くあるが、ブリューゲルの名前はなく、他のフランドルの画家たちの名前も見出されなかったという。この来訪者名簿は現在、ボローニャ大学図書館写本室に保存されている。これらの内容について、Olmi 教授は以下の論文にその研究を発表しておられる。
 Giuseppe Olmi, *L'Inventario del Mondo. Catalogazione della natura e luoghi del sapere nella prima età moderna*, Bologna, 1992. とくに関係深いのは第1章 "Osservazione della natura e raffigurazione in Ulisse Aldrovandi" (pp. 21-118) であり、アルドロヴァンディの芸術家工房で働いていた画家、版画家については pp. 61-90 に詳述している。しかしフランドルからの画家が全くアルドロヴァンディの展示室に訪れていないということは考えられなく、Tine Meganck もその著書 (pp. 54-58他) でなんらかの可能性を述べている。
- 61) グランヴェル大司教の博物学コレクション: Meganck, pp. 146-148, pp. 150-152.
- 62) Joris van Grieken et al, *Hieronymus Cock, The Renaissance in Print*, Antwerpen, 2013, pp. 340-341.
- 63) メハンク博士はベルギー王立美術館研究員として長年、同美術館所蔵のブリューゲルの《反逆天使の転落》を研究し、本誌57で引用した研究書を2014年秋に出版した。ブリューゲルのこの作品に画家自身およびアントウェルペンで活躍する人文主義者の博物誌な関心が強く反映しているという研究は画期的である。

しかし同書の後半に展開するメハンクの仮説、つまりブリュゲルがこの作品に「ネーデルラントの為政者への叛乱」を暗喩したのでは、という政治的な解釈には異論がある。だがその議論は本稿のテーマからそれるので、筆者の反論は別の機会に譲りたい。

64) Meganck, p.82

65) アルドロヴァンディの博物館の歴史は Walter Tega, ed., *Guide to the Museo di Palazzo Poggi: Science and Art*, Bologna, 2001, pp. 20-31 および学芸員 Fulvio Simoni 博士 から提供された情報である。

66) フィンドレン, pp. 33-42.

67) Alessandrini e Ceregato (注25参照)

Insights into Ulisse Aldrovandi's *QVADRVPEDEM OMNIVM BISVLCORVM HISTORIA* (1621, Bologna) with Consideration for 17th Century Flemish Painting

Yoko Mori, Lecturer, Graduate School of Art, Nihon University

Abstract

This study focuses on two aspects: namely, what is remarkable for present veterinary science concerning Aldrovandi's research on even-toed ungulates of four-footed beasts, and whether Aldrovandi's concept of natural history, his collection as well as writings, could have directly or indirectly influenced 17th century Flemish painters. Aldrovandi's collection of stuffed beasts, birds, insects, aquatic animals, dry plants and minerals affected not only Italian intellectuals and artists, but also people from all over Europe.

According to his scientific observation on Aldrovandi's book mentioned above, Dr. Hiroshi Gomi—Professor of Veterinary Science, College of Bioresource Science at Nihon University—points out in this paper how Aldrovandi precisely describes the fetus and fetal membranes in the womb (fig. 10) based upon anatomy, and how Aldrovandi was quite familiar with hair bulbs inside of cattle's digestive tracts (fig. 11). In addition Prof. Gomi is impressed by Aldrovandi's rich knowledge of the medical efficacy of “a stone of Bezoar” (may be the horn of Tibet antelope) inhabiting the region near China located on the opposite side of the Ganges in India, as well as various deformed cattle and so-called “chimera” after the modern definition. I assume Aldrovandi's important German engraver, Cristoforo Coriolano (Lederer) from Nuremberg was probably well acquainted with the single leaves of woodcut prints published in his native town depicting such as news of a born deformed black lamb with one head, four hands and four legs (fig. 24). Coriolano may have added to Aldrovandi's collection such German prints of deformed animals.

I should draw attention to the fact that Aldrovandi is also an extremely learned humanist to be able to explain the character of each four-footed animal from its symbol, emblem, legend, proverb, mystic, numismatics and many other information of humanities.

From an art historian's view, I would like to propose that Jan Brueghel the Elder may have visited Aldrovandi in Bologna during his stay in Italy (c.1590-1596), because his Italian patron, Cardinal Federico Borromeo, also financially supported Aldrovandi. Jan Brueghel painted in his “Air” (fig. 32) various aquatic birds living in exotic as well as tropical countries. He may have studied from Aldrovandi's book on birds, because his close friend Peter Paul Rubens possessed this book. Roelant Savery, a skilled animal painter, naturally depicted numerous beasts and birds in his “Heaven” (fig. 35) reflecting the keen interest in natural history of his clients and their intellectual circle. A palmed hart was a favorite beast for forest landscape painters like Jan Brueghel (fig. 33) and Roelant Savery (fig. 35). Aldrovandi also illustrates this animal and mentions that it has been preserved in the castle in Ambras, Innsbruck. According to recent research by Luc Tine Meganck (2014),⁵⁷ Antwerp was also an important center of natural history. Thus it is no wonder that Jan Brueghel the Elder, his grandson, Jan van Kessel (fig. 37, 39) and his contemporaries demonstrate their earnest interest in natural history and that Aldrovandi as a scientist should leave us after a lifetime of dedication, his extensive research of natural history in eleven books.

Acknowledgment

This paper was written on the occasion of the acquisition by Nichigai Library, Nihon University in 2013 of the above mentioned book by Aldrovandi. I received valuable scholarly instruction from Dr. Giuseppe Olmi, Professor of University of Bologna and the important academic information from Dr. Simone Fulvio, Curator of the Ulisse Aldrovandi Museum. Professor Hiroshi Gomi, Veterinary Science, Nihon University contributed greatly to my article by interpreting the historical meanings and the characteristic features of Aldrovandi's animals. Associate Professor Akihiko Watanabe, Otsuma Women's University graciously assisted me in reading the Latin text.